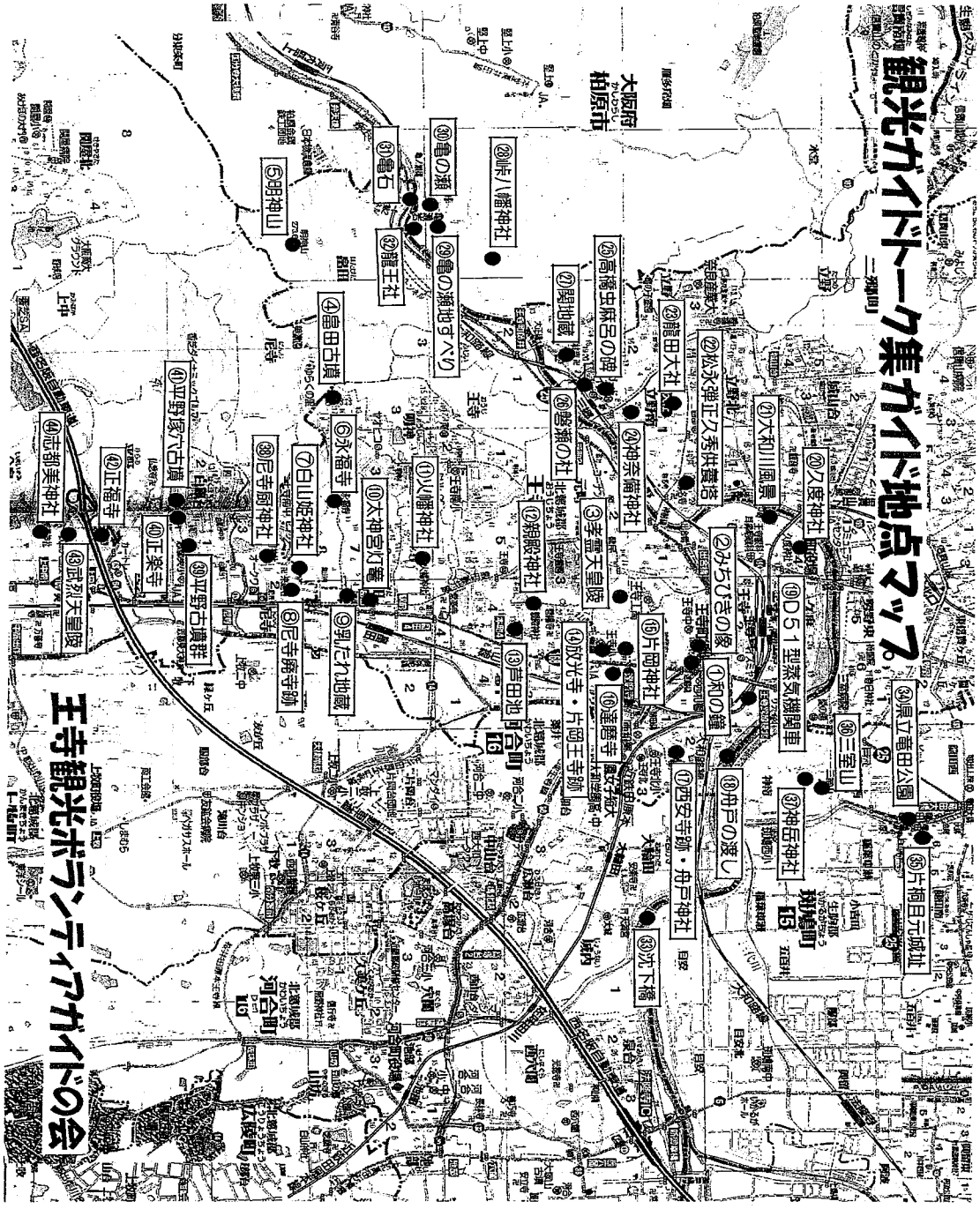
王寺観光スポット
ガイドトーク集

王寺観光ボランティアガイドの会

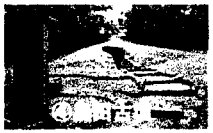
目次

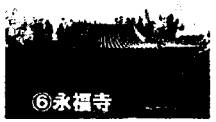
観光ガイドトーク集地点マップ・・2
王寺観光スポット地点写真集・・・3
スタート時・終了時トーク・・・・4
① 和の鐘・・・・・・・・・・・・・・5
② みちびきの像・・・・・・・・・・・5
③ 孝霊天皇陵・・・・・・・・・・・・6
④ 畠田古墳・・・・・・・・・・・・・7
⑤ 明神山・・・・・・・・・・・・・・8
⑥ 永福寺・・・・・・・・・・・・・・12
⑦ 白山姫神社・・・・・・・・・・・・13
⑧ 尼寺廃寺跡・・・・・・・・・・・・15
⑨ 乳たれ地蔵・・・・・・・・・・・・17
⑩ 太神宮灯籠・・・・・・・・・・・・19
⑪ 火幡神社・・・・・・・・・・・・・21
⑫ 親殿神社・・・・・・・・・・・・・22
⑬ 芦田池・・・・・・・・・・・・・・23
⑭ 放光寺・片岡王寺跡・・・・・・・24
⑮ 片岡神社・・・・・・・・・・・・・25
⑯ 達磨寺・・・・・・・・・・・・・・26
⑰ 西安寺跡・舟戸神社・・・・・・・32
⑱ 舟戸の渡し・・・・・・・・・・・・35
⑲ Ｄ５１型蒸気機関車・・・・・・・36
⑳ 久度神社・・・・・・・・・・・・・37
㉑ 大和川風景・・・・・・・・・・・・39
㉒ 松永弾正久秀供養塔・・・・・・・40
㉓ 龍田大社・・・・・・・・・・・・・41
㉔ 神奈備神社・・・・・・・・・・・・43
㉕ 高橋虫麻呂の碑・・・・・・・・・44
㉖ 磐瀬の杜・・・・・・・・・・・・・45
㉗ 関地蔵・・・・・・・・・・・・・・46
㉘ 峠八幡神社・・・・・・・・・・・・46
㉙ 亀の瀬地すべり・・・・・・・・・47
㉚ 亀の瀬・・・・・・・・・・・・・・49
㉛ 亀石・・・・・・・・・・・・・・・50
㉜ 龍王社・・・・・・・・・・・・・・50
㉝ 沈下橋・・・・・・・・・・・・・・51
㉞ 県立竜田公園・・・・・・・・・・52
㉟ 片桐且元城址・・・・・・・・・・53
㊱ 三室山・・・・・・・・・・・・・・54
㊲ 神岳神社・・・・・・・・・・・・・55
㊳ 尼寺厨神社・・・・・・・・・・・・56
㊴ 平野古墳群・・・・・・・・・・・・57
㊵ 正楽寺・・・・・・・・・・・・・・58
㊶ 平野塚穴古墳・・・・・・・・・・58
㊷ 正福寺・・・・・・・・・・・・・・59
㊸ 武烈天皇陵・・・・・・・・・・・・60
㊹ 志都美神社・・・・・・・・・・・・60
和州送迎太神宮之図・・・・・・・62
和州平群郡立野龍田本宮絵地図・・63

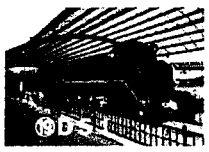
観光ガイドトーク集ガイド地点マップ



王寺観光スポット地点写真集







「スタート時」トーク

本日は**「聖徳太子ゆかりの街王寺町」**にご来訪いただき有難うございます。
　　ｱﾄﾞﾘﾌﾞ（遠方からお越しいただきありがとうございます。）
本日の観光ガイドを担当させていただきます〇〇です。宜しくお願いします。
ご案内させて頂くコースは受付でお渡ししましたコース地図を参照ください。

・先ず、ここ王寺駅からの**「コース説明」**と、所用時間とトイレ場所（昼食場所）の確認。

・コース道の特徴と注意することの説明と**「交通安全に気をつけることを忘れないように」。**

又歩行ついて、**「先頭ガイドより前に行かないよう、又最後尾ガイドより後ろに行かないように」**、協力をお願いします。

(時間に余裕があれば、王寺町の紹介をします)

さあー今から出発しましょう。
ゆっくりペースで歩きますが、もしペースが速いと思われたら遠慮なさらず申しつけ下さい。**「楽しい一日になりますようご協力宜しくお願いします。」**

「終了時」トーク

皆さん此処で解散させていただきます。
本日ご案内させていただきました所は王寺町の観光スポットの一部です。まだ**「ご案内したい沢山の観光スポットがございます。王寺観光ボランティアガイドの会のホームページをご覧いただき再度来訪の計画を作られます事をお願いします。
皆様のご協力で事故無く終了出来ました事お礼申し上げます。又のご来訪お待ちしております。」**
　本日は誠にありがとうございました。お気をつけてお帰り下さいませ。

メモ

①「和の鐘（やわらぎのかね）」ガイドトーク

王寺駅から達磨橋を渡った堤防の角に、王寺町のシンボルの**「和の鐘」**があります。

それでは、足元に気を付けて**「和の鐘」**の前に集まってください。
「平成元年（1988）年、竹下登首相が、**「ふるさと創生事業」**として、全国市町村に**「1 億円を交付」**しました。
王寺町は、この 1 億円で**「和の鐘」**を建設いたしました。名称は、聖徳太子の**「十七条の憲法」**の**「以和為貴」**の精神に由来しています。時計の台座のプレートには、昭和 40（1965）年に制定された**「町民憲章」**と、そして王寺出身の中村泰士さん作曲の**「王寺町歌」**を記載しています。なお、若い方には、ピントこないかも知れませんが中村泰士さんは、ちあきなおみの「喝采」や細川たかしの「北酒場」などを作曲された方です。
この和の鐘は**「2 時間おきにからくり人形が回り曲が流れます。」**時間があれば、曲が流れる時間に合わせて見に来て下さい。（今日は、見れてラッキーだったですね）

話が変わりますが、全国での 1 億円の使い道は色々だったようです、話題になったのでは、淡路島の津名町が 1 億円を保証金に**「金塊をレンタル」**、入場料を取って展示しました。そして金相場が高騰して、お儲けでしたね。
また、他の市町村では、使い道に困った挙句、1 億円全額で宝くじを購入したり、温泉を引こうとボーリングしたものの温泉は出ず、1 億円を無にした所も多々ありました。
次に「みちびきの像」に移動してください。
メモ

②みちびきの像」ガイドトーク

「みちびきの像」の前に集まって下さい。
毎日のように、テレビや新聞などで、不法や無謀運転などによる交通事故が報道

されています。この王寺町でも「**昭和31（1956）年**」に登校中の小学生の列にトラックが突っ込み、「**下級生をかばおうとした上級生と合わせて２人死亡、２人重傷という惨事があり**」、二度と悲惨な事故を起こさないでほしいという願いを込めて、「**交通安全のシンボル**」として建立されました。今の像は平成６（1994）年に再建されたもので、以前は役場の北東の角にありました。皆さん車は安全運転で事故の無いようにしましょう。

メモ

③「孝霊天皇陵」ガイドトーク

皆さま石段の前にお集まり下さい。孝霊天皇陵について、ご説明いたします。

「**孝霊天皇は、第７代の天皇**」です。御陵の名前は「**片岡の馬坂の陵**」と呼ばれています。孝霊天皇は、田原本の黒田で住まいされていて、王寺町に墓がなぜあるのかは不明です。

王寺町には、天皇陵はこの一つだけですが、となりの香芝市に２つの天皇陵があります。それは、「**第２３代の顕宗天皇**」の「**片岡磐坏丘南陵(かたおかのいわつきのおかのみなみのみささぎ)**」と「**第２５代武烈天皇**」の「**片岡磐坏丘北陵(かたおかのいわつきのきたのみささぎ)**」があります、香芝市の二上山の近くから王寺町にかけての一帯を「**片岡の里**」と呼ばれておりこの３陵を「**片岡３陵**」と呼んでいます。

この天皇陵は「**丘陵を利用した山形の古墳**」で、石室等は見つかっておりません。

孝霊天皇についてですが、孝霊天皇は、「**欠史八代（缺史八代）の天皇**」の一人です。欠史八代とは、「**日本書記**」や「**古事記**」に「**天皇の系譜は載っていますが事績が載っておらず**」この様に呼ばれています。実在した天皇は 10 代の崇神天皇からと云われています。又天皇という称号は、４０代の天武天皇のころから正式に使われるようになったと言われています。

孝霊天皇の直接の話はありませんが、子供にまつわる話があります。

ひとつは、「**皇女の倭迹迹日百襲媛命(やまとととびももそひめのみこと)**」です。倭迹迹日百襲媛命は、巫女的な能力があり崇神天皇に頼まれ災害が続く理由を占ったりしていた。のちに三輪山の大物主神の妻となったが、大物主を怒らしてしまいショックのあまり倒れ込み、箸が体に突き刺さり死んだとされていて、埋葬した彼女の墓と伝わっている桜井市の「**箸墓古墳**」が有名です。この「**古墳は前方後円墳**

の最初の墓」です。又「**卑弥呼ではないか**」という説もあります。
二つ目は、「**皇子の桃太郎伝説で有名な吉備津彦命**」です。奈良の田原本町が吉備津彦の故郷であるとされており、田原本町の初瀬川には、川上から男の子が、甕に乗って流れて来て西の方角に向かって神になったという伝承が残っています。又桃太郎は岡山のシンボルとして有名です。そして鬼ノ城の温羅「ウラ」退治で（一本の矢を２本にして、キジの「ウラ」を鷹になり追い、鯉の「ウラ」を鵜になり食べて退治）で知られていて、その後江戸時代に今の桃太郎になったと言われています。

また新しい情報として、今まで石室等の墳丘内の調査は掘削しておりましたが、掘らずに、「**宇宙線を使って墳丘内を調査する技術**」が開発されています。
もう一つ、古墳巡りをされている方に情報として、現在ある 124 の天皇陵にそれぞれに「**御陵印**」というのがあります、お寺の御朱印のようなものです。御陵印は各地の「**陵墓監区事務所**」にあるので、今までに行ったところの印を集めてはどうですか。
これで孝霊天皇陵の説明を終わります。帰り下り坂で階段で滑りやすいので足元に気を付けて降りて下さい。それでは出発いたします。

メモ

④「畠田古墳」ガイドトーク

古墳の案内板の前にお集まりください。
前に見えますのが、「**畠田古墳**」です。それでは「畠田古墳」のご説明させていただきます。

古墳は、「**6 世紀後半から７世紀初頭に築造**」されたと思われます。古墳の埋葬者はわかりませんが、山の中や地形から「**渡来人か渡来文化をもった人びとによって造られた**」と考えられます。
平成９年に公園として整備するための発掘調査の結果、古墳の形状は「**直径 15m で高さ 4m 以上の円墳で、南側に 5.9m の横穴式の石室**」があることがわかりました。また鉄釘そして「**２種類３点の金環**」が発見されています、このことから「**埋葬されていたのは２体で木棺におさめられていた**」ことを示しています。

この後、石室の中に入っていただきますが、石室を入った左側に「**壁画**」があり

ます。壁画は石の面に幅 23cm、高さ 25cm にわたって線で刻まれたもので、柔らかな表情の顔に、**「烏帽子をかぶった人の上半身」**が描かれています。しかしこの壁画は、造られたときに描かれたものではなく、石室内に出入りが出来たので、おそらくこの壁画は**「鎌倉時代から江戸時代に描かれたもの」**と考えられます。

では、足元に気を付けて狭いですので一列で順番に見てください。

メモ

⑤「明神山」ガイドトーク

（明神山道入口大鳥居北の案内板前で）

この案内板ご覧ください。**標高約２７４M の低い山で**す。ここから山頂まで約 1870m **ゆっくり登って約 40 分で山頂に着きます**。登り始めは少しきつい坂道ですが 10 分程登りますとなだらかな道に変わりますので、初めだけ少し頑張りましょう。**頂上では 360 度のパノラマの景色が皆様をお待ちしています**。奈良盆地が一望、本日は天気もいいので明石海峡大橋やアベノハルカスも見えることでしょう。さあーゆっくりペースで登っていきましょう。

（車止め前で）

この先右手にコンクリート建物のポンプ場が見えますね。そこからは、なだらかな登り坂に変わりますから、もう少し頑張りましょう。

（初めのベンチ前で）

お疲れになりましたらそのベンチで少し休みを取りますが如何ですか？
杖が沢山ありますね。お使いいただけるよう、ボランティアの方々が用意していますので、必要な方はどうぞお使いください。下山時にここに立て掛けて頂ければ結構ですから。

『途中の山道で来訪者とよもやま話を心掛けよう』

（石の道標前で）

この道標をご覧ください。少し見え難いですけど**「右　大坂　さかい」**の文字が書かれていますね。右の道を進みますと柏原市の国分に繋がっていました。**1614年大阪冬の陣の折、徳川家康が軍を率いてこの道を通ったと言われています。当時は大和から大阪に行く奈良街道は大和川の右岸つまり大和川の北側の道（亀の瀬越え奈良街道）しか無かった。大軍を率いていくのに左岸の道も必要とし、立野村現在の三郷町立野の地侍、安村喜右衛門に命じて道を切り開いたと言われています。また家康が亀の瀬の亀岩の首が切られていたのを忌み嫌って右岸の道を通りたく無かったとも言われています。**

（亀の瀬地滑り説明板前で）

（指差しながら）前の斜面の木の生えていない所をご覧ください。あの大きな範囲が地滑りが発生した地域です。「地滑り」と聞いてすぐに思い浮かぶのが「土砂崩れ」でしょう。土砂崩れとは単純に斜面で土が安定性を失って崩れることを言います。これに対して地滑りとは、地面の中に「すべり面」とよばれる粘土の層があり、その上にたまった地下水の影響で、すべり面より上に堆積している土が移動する現象の事を言います。地滑りは土がある程度形を保ったまま、ゆっくりと斜面の下の方に移動するのが特徴です。記録のある中で最も大規模な地滑りは昭和6～7 年の地滑りです。説明板の左上の写真をご覧ください。大和川が地滑りで堰き止められ王寺町が大規模な浸水被害を、被りました。

当時鉄道の関西線は大和川の北側に線路がありトンネルもありました。この地滑りで線路もトンネルも崩壊し、急遽大和川に鉄橋を作り南側の明神山の下にトンネルを掘り現在の鉄道になっています。奈良盆地の河川の水は全て大和川に流れ、亀の瀬を通って大阪平野に流れています。奈良盆地の水が流れ出ていく所が無くなりますと、奈良県側でたちまち浸水被害が発生することになります。地滑りで堆積した土が決壊しますと大阪府にも大規模な水害が発生する恐れがあります。そこで昭和35 年から対策工事を始め、じつに 50 年の年月をかけて平成 22 年にようやく主な対策工事が完成しました。**工事内容の詳細説明や排水トンネルの見学は掲示板の右手に書かれています「国土交通省近畿整備局の大和川河川事務所」に連絡すれば可能です。ご興味のある方は河川事務所まで連絡してみてください。崩壊した鉄道トンネルも見学できますよ。**
あーもう少しで山頂の鳥居が見えてきます。

（トイレ前で）

山頂での説明をしますので、お手洗いに行かれる方は今の内済ませて下さい。全員

揃ったところで説明開始しましょう。

（山頂広場に集合）
明神山は金剛・葛城山系の北端に位置した標高約２７４mの低山ですが、360 度の眺望がご覧になれます。
先ずは東展望台から奈良盆地を見渡しましょう。

（東展望台上で）

写真パネルを参考にして東側の山々、大台山系・大峰山系・百名山の八経ヶ岳も見えますね。関西のマッターホルンと呼ばれている高見山が正面奥に見えます。大物主の大神が祀られている三輪山も正面にみえます。**「奈良盆地は南北３０ｋｍ東西１５km の範囲に南側に飛鳥京、正面に見えます大和三山畝傍山・耳成山・天香久山に囲まれた藤原宮跡も」**ご覧になれますね。（しばし時間を置く）
　北の方をご覧ください。**「若草山の麓に大仏殿・興福寺五重塔が見えますね。平城宮跡も」**見えます。ここ明神山から都の変遷が一望できるのです。**「日本の国造りが始まった大和が、私たちの目の下に」**見えているのです。きっと古代の人達も夕日の沈む美しい二上山と一緒に明神山を見られたことでしょう。この奈良盆地を見ていますと**「古代の人達の国造りの息吹きが感じられます」。**
　望遠鏡を使いますとより詳しくご覧になれますので、ご利用お勧めします。

（西展望台上で）

　今日は天候に恵まれ、**「大阪湾・明石海峡大橋」**が良く見えますね。アベノハルカスもあちらに見えます。写真パネルを参考にしてご覧ください。世界遺産に申請している**「古市古墳群」**や**「中百舌鳥古墳群」**が一望できます。**「応神天皇陵や仁徳天皇陵」**がご覧になれます。

（誓のテラス SORANI と悠久の鐘の前）

展望デッキから伸びているテラスは**「誓のテラス SORANI」**と名付けられ、**「若い男女が悠久の鐘を鳴らし愛を誓う場所として作られました。」**若者だけではなく、中高年やお年寄りのカップルも一緒に鐘を鳴らしている微笑ましい光景が見受けられます。きっと二人の絆を確かめ合っているのでしょうね。
　さあー皆さん鐘を鳴らしましょう。記念写真をお撮りしますよ。

（雪丸願札かけ処）

聖徳太子の愛犬といわれた「雪丸」を王寺町はマスコットキャラクターとし、全国に宣伝していることはご存知と思います。**「賢い犬といわれていますので、願いを掛ける方か多く、ここ明神山にも願札かけ処を設けています」**。もし、願札で願掛けご希望の方は、雪丸願札を用意していますのでお申し付けください。

（北の展望台上で）

ここから見える**「正面の山は信貴山」**です。**「山上の朝護孫子寺も聖徳太子とゆかりのある寺」**ですね。**「その先の山はご存知の生駒山」**です。空が澄んでいる時は生駒山のずっと奥に**「比叡山や蓬莱山」**が見えますよ。（少し間を置く）さて、**「眼下には大和川」**が流れています。その昔、**「遣隋使や遣唐使が難波津から川船に乗り換え、大和川を利用し亀の瀬まで遡上し、再度川船を乗り継ぎ桜井の海柘榴市(つばいち)まで来て、飾り馬を仕立てて飛鳥の宮へ来た」**と伝えられています。ここ明神山からそのルートが覗えます。**「右の方角に法隆寺の五重塔が」**見えますね。聖徳太子が国家戦略の基になる**「十七条憲法」**がつくられた所ですね。聖徳太子が散策された場所もきっとあの辺りでしょうね。

（北展望台下の大型掲示板前で）

３つの展望台から 360 度のパノラマが堪能できましたでしょうか。
橿原考古学研究所の菅谷所長は、ここ**「明神山は十国展望台」**と言われています。**「播磨国・淡路国・摂津国・和泉国・河内国・山城国・近江国・大和国・伊勢国・紀伊国の十か国」**がこの山頂から見渡せることです。周りに高い山が隣接していないからこんなに見晴らしがいいのですね。この掲示板に書かれています様に**「百済を助けるべく日本から軍隊を朝鮮半島に送りますが、白村江の戦いで唐・新羅の連合軍に敗れてしまいました。大和の入り口の砦として信貴山の大阪よりの高安山に城を築き敵来襲に備えたようです。ここ明神山も高安山の狼煙の合図を受ければ、山頂で狼煙を上げ大和朝廷に直ちに伝達する役目も負っていた」**ように思われます。江戸時代は大阪の米相場の連絡を受け山頂で旗を振って奈良に伝えたことで、旗振り山とも言われたようです。

(水神社及び神社前の大型掲示板前で)

掲示板の左側に**「和州送迎(ひるめ)太神宮之図」**があります。この図によりますと**「江戸時代にここ明神山頂に送迎太神宮」**がありました。この神宮は江戸時代のおかげ参りにともなって建てられた神社なのです。**[おかげ参りとは、全国から数百万の人々が一斉に伊勢神宮にお参りすること]**を言います。不思議なことにそれは、1650 年・1705 年・1771 年・1830 年と**「およそ 60 年ごとに発生」**しました。送迎

太神宮が建てられたきっかけは、**「1830 年 4 月に明神山にお札が降ったことによります。」**そうするとそこが**「元伊勢」といって伊勢神宮が移ってきた、**また伊勢神宮の本家だと考えてお参りする人が出始めました。**「9 月に領主の郡山藩に神社建立を願い出て冬には完成」**しました。**「鳥居や灯籠・神馬が奉納され伊勢神宮をまねて宇治橋や天岩戸などもつくられました。お参りする人が数万人に登り大変にぎわい麓の畠田村には茶屋や伊勢神宮のお土産として人気のあった薬を売る万金丹屋ができた」**そうです。ところが**「翌年の 1831 年（天保２年）の５月に送迎太神宮は伊勢神宮の偽物との理由で郡山藩主により取り払われてしまいました」**。残念ながらわずか 1 年ほどの賑わいでした。**「奉納された鳥居や灯籠、神宮の拝殿は麓の畠田地区の神社で再利用され現在でもそれが確認できます。」**現在の神社は**「水神社」**と称し、雨乞いの神様が祀られています。毎年八朔の日に（9 月 1 日）畠田地区の氏子が集まりお祭りをしています。

この明神山は王寺町民にとって丁度良いウォーキングコースになっています。毎朝、日の出に合わせて山頂目指すウォーキンググループや昼間の家族連れ等一日中ウォーキンググループが訪れます。無理せず登れますので誠に健康ウォーキングになります。

ぜひ機会をつくられグループで再度お越しになられることをお勧めします。

以上で明神山頂でのガイド説明は終了しますが、まだ下山には時間がございますので山頂での景観をお楽しみください。何かご質問がございましたら何なりとお尋ねください。

〇〇時〇〇分に下山しますので、お手洗いを済ませて鳥居前にお集まり下さいませ。

メモ

⑥「永福寺」ガイドトーク

永福寺は**「来迎山」**という山号の寺で**「行基」**が開祖した寺を、慶安２年（1649 年）に**「正波」**という名のお坊さんが中興したものと言う記録があるそうです。

正波と言う名が寺蔵の**「峯心（ほうしん）坐像」**の底面にある銘にその名が残っていて、寛文 10 年９月 25 日に 70 歳で亡くなったとの記録があります。

大阪の東天満にある**「九品寺」**は和銅元年（708年）行基の開祖であり，天正年間（1573年～92年）**「念誉」**と言うお坊さんがこの地に移して、浄土宗に改宗したと伝えられています。

正波は同じ九品寺の**「正誉」**を師としていたため、同じ行基開祖の縁で永福寺の中興に当たったといわれます。

また当時の中興に際し、当寺の檀那　**「丹羽淨清」**　妙春夫妻が草庵を立て、行基自作の釈迦像を安置したと言われています。

永福寺は近世を通じて京都知恩院の直末寺であります。

境内の**「観音堂」**は丹羽淨清の子**「実済」**が創建したと言われています。

永福寺の境内敷地は現在は、ほぼ美しが丘に登る幹線道路までとなっていますが、住宅開発の前には、王寺南中の北側から畠田古墳を通過して明神山へ通じる古道までであったそうです。

住宅開発の道路整備のために、敷地が二つに分断されて狭くなったようですが、それまでは相当大きな敷地を有していたようです。

メモ

⑦「白山姫神社」ガイドトーク(鳥居から本殿へ)

はい、白山姫神社の鳥居前に着きました。この階段を上れば拝殿、本殿に行きますが、この場でちょっと説明をしたいと思います。

今では、知名度が高くなった王寺町の明神山に、江戸末期に**「送迎太神宮」**が建てられ、お伊勢参りの代わりとして大いに賑わいましたが、一年足らずで取り壊されました。

しかし、その遺品が残されていました。それが、目の前の**「鳥居と階段の一部」**です。まず鳥居ですが、１８３１（天保２）年３月、また世話人の名前が彫られていることから、**「送迎太神宮に奉納されたもの」**と思われます。つぎに参道の石段ですが、下から数えて**「五段目と六段目の石」**です。よく見ると横向きに文字が彫られています。**「５段目の石は、右半分が欠けている状態で「送迎太神宮」と彫られ、六段目の石には「よしの・大みね」の文字」**が見えます。

これらの石は、送迎太神宮を案内する道しるべであったと思われ、それを再利用したのでしょうね。

それでは、気を付けて石段の文字を確認しながら登ってください。

「白山姫神社」の拝殿前に来ました。

創建ははっきりしていませんが、元禄９年（１６９６年）３月に奉納されている石灯には白山権現御神前と刻され、加賀白山と関係があったことがうかがえます。畠田地域の氏神さんで、祭神の**「白山比咩命（しろやまひめのみこと）」**は**「五穀豊穣」**を祈願する神として、厚い信仰をあつめていました。登ってくる途中の香塔寺とは、江戸時代には神仏習合の状態にあったらしいです。

拝殿前の**「石造唐獅子一対」**は、弘化２年（１８４５年）１２月に氏子が奉納したものです。また、境内には摂社として、**「金毘羅神社と春日社」**があります。その春日社近くの灯篭も、貞享（じょうきょう）４年（１６８７年）に「畠田村香塔寺氏子中」によって奉納されたものです。

昔はこの境内で**「なもで踊り」**があり、何をやっても雨が降らない時に一昼夜通して踊ったと言うことです。

最後に、王寺町にある神社、この白山姫神社もそうですが、絵馬が多く奉納されています。子供が生まれると、神社の氏子になったしるしに、その年の春祭りに絵馬を奉納します。絵柄は男の子なら宇治川の先陣、女子なら尉（じょう）と姥が多いようです。

それでは、階段を降りて先ほどの鳥居の下で集合してください。気を付けて降りてくださいね

⑦「白山姫神社」ガイドトーク(本殿から鳥居へ)

はい、白山姫神社の横道から拝殿前に着きました。通常の説明の順序は、下の鳥居前で説明を行ってからこの拝殿前来ますが、今日はまずここで説明をしたいと思います。

それでは、**「白山姫神社」**の説明を行います。

創建ははっきりしていませんが、**「元禄９年（１６９６年）３月」**に奉納されている石灯には白山権現御神前と刻され、**「加賀白山と関係」**があったことが伺えます。

畠田地域の氏神さんで、祭神の**「白山比咩命（しろやまひめのみこと）」**は**「五穀豊穣を祈願」**する神として、厚い信仰をあつめていました。降りる途中の香塔寺とは、江戸時代には神仏習合の状態にあったらしいです。

拝殿前の**「石造唐獅子一対」**は、弘化２年（１８４５年）１２月に氏子が奉納したものです。また、境内には摂社として、**「金毘羅神社と春日社」**があります。その春日社近くの灯篭も、貞享（じょうきょう）４年（１６８７年）に「畠田村香塔寺氏子中」によって奉納されたものです。

昔はこの境内で**「なもで踊り」**があり、何をやっても雨が降らない時に一昼夜通して踊ったと言うことです。

最後に、王寺町にある神社、この白山姫神社もそうですが、**「絵馬が多く奉納」**されています。子供が生まれると、神社の氏子になったしるしに、その年の春祭りに絵馬を奉納します。**「絵柄は男の子なら宇治川の先陣、女子のなら尉(じょう)と姥」**が多いようです。

それでは、階段を降りて鳥居の下で行きます。気を付けて降りてください。

はい、神社の鳥居前まで降りてきました。ここでは、送迎太神宮に関係したことの話をしたいと思います。

今では、知名度が高くなった王寺町の明神山に、江戸末期に**「送迎太神宮」**が建てられ、お伊勢参りの代わりとして大いに賑わいましたが、一年足らずで取り壊されました。

しかし、その遺品が残されていました。それが、目の前の**「鳥居と石段の一部」**です。まず鳥居ですが、１８３１（天保２）年３月、また世話人の名前が彫られていることから、**「送迎太神宮に奉納されたもの」**と思われます。

つぎに参道の石段ですが、下から数えて**「五段目と六段目の石」**です。よく見ると横向きに文字が彫られています。**「５段目の石は、右半分が欠けている状態で「送迎太神宮」と彫られ、六段目の石には「よしの・大みね」の文字」**が見えます。

これらの石は、送迎太神宮を案内する道しるべであったと思われ、それを再利用したのでしょうね。

それでは次の案内場所に向かいます。

メモ

⑧「尼寺廃寺跡」ガイドトーク

王寺町のすぐ隣の香芝市の素晴らしい史跡公園には気持ちを躍らせて入ります。ここが**「尼寺廃寺跡」**です。説明板の前にお集まり下さい。

史跡・尼寺廃寺跡は、**「尼寺北廃寺」**と**「尼寺南廃寺」**からなっています。現在いるところは、**「尼寺北廃寺」**です。この場所は、平成３年度から発掘調査を行なわれ、平成８年に全国最大の心礎と舎利荘厳具（しゃりしょうごんぐ）が見つかり

「聖徳太子建立の葛城尼寺か？」として大きく報道されました。その後、平成 14 年 3 月に国史跡に指定されて、平成 28 年 4 月に史跡公園・学習館がオープンしました

それでは、尼寺北廃寺について説明いたします。

「飛鳥時代（7 世紀後半）に創建された寺院跡。奈良時代後半まで存続した後に廃寺」となりました。

「聖徳太子が建立した「葛木寺」跡とも、敏達天皇の孫、茅渟王（ちぬのおおきみ）にまつわる寺」とも言われています。

発掘調査の結果から、北側に東西 14.7m・南北 16.8m の金堂の基壇と、南側に 13.6m 四方の塔の基壇、そして東側に中門と金堂と塔を取り巻く回廊が発掘されました。これらの配置から、東向きの法隆寺式の伽藍配置と確認されました。

塔の高さは、**「基壇上に現在見えている 12 個の礎石の配置から 40 ㍍級と推定」**されます。

そして、塔の基壇の 1m 下の地中から**「日本最大級の心礎」**が見つかりました。

その心礎とは、基壇下に埋められて塔の心柱を支えた石材です。大きさは、**「約 3.8 ㍍四方・厚さ 1.8 ㍍で、8 畳間ほどもある巨大な石」**を使っています。今は、そのまま埋め戻されていて、実物を見ることはできませんが、足の下にそんな巨石があるかと思うだけで驚きです。

また心礎に柱を立てる**「柱座」**の部分から、**「耳環・水晶丸玉・ガラス丸玉など、多彩な舎利荘厳具が出土」**しました。

そして、尼寺廃寺跡中心に、出土した古瓦は、**「軒平瓦」**で、その種類が多く、作られた期間も**「白鳳期から平安時代」**まで、相当長期にわたっています。

遺跡の古瓦から、白鳳期の 7 世紀後半には、この地に大寺が創建されたことだけは確実です。延歴 7（788）年の「上宮皇太子菩薩伝」には、**「尼寺に聖徳太子の建立した般若寺があったと記され」**ています。

次に、**「尼寺南廃寺」**についてですが、ここから約 200m 南側の**「般若院」**の境内で、平成 16 年に発掘調査が行われました。その結果、東側に南北 14m 四方の基壇と西側に 12m 四方の基壇が発見されました。南を正面とする南向きの**「法隆寺式伽藍配置の跡」**が、**「尼寺南廃寺」**と確認されました。

また、出土した瓦から 7 世紀中ごろから造営されたものと推測されます。

「尼寺北廃寺」と「尼寺南廃寺」は、**「僧寺」**と**「尼寺」**の、セットで見られています。

それでは、学習館にご案内いたします。

「平成 28 年にオープン」した学習館の中には、尼寺廃寺史跡公園の塔跡に埋まっ

ています、**「日本最大級（約3.8㍍四方）の心礎を同じ形に作り床下に埋めて」**、透明の板で上から見えるようにしています。（凄い迫力だ）**「耳環・水晶丸玉・ガラス丸など、舎利荘厳具など」**も、展示しています。なお、奥の壁には心礎などの大きな石がどのような位置に埋めてあったかが分かるようになっています。
学習館内の展示物をご覧ください。トイレもございますのでご利用してください。
メモ

⑨「乳たれ地蔵」ガイドトーク

（通常は、大きい文字のみ説明してください。小さい文字は、時間があれば説明してください。）

・皆さま、この前の道は車が頻繁に通りますので、ちょっと狭いですがこの境内の中にお入り下さい。

〈「乳たれ地蔵」の説明〉　（真ん中の石製の祠を指して）

・この真ん中奥の、石の祠の中にある自然石を**「乳(まま)たれ地蔵」**と言います。
他に**「ままかけ地蔵」**とか**「ままだれ地蔵」とも呼ばれています。**
自然石を祀っており、婦人の母乳の出が良くなるとして広く信仰を集めています。
・全国に婦人の母乳の出を祈る「お地蔵様」や「仏様」はいくつかあります。
昔は今のようにミルクと言うものがありませんので、庶民にとって母乳が出るかどうかは死活問題であったろうと思います。
そこで**「赤ちゃん」**にとっての**「まま」**である母乳が**「垂れるように出る」**ことを、この**「乳たれ地蔵」**にお願いしたのではないでしょうか・この地蔵の由緒としましては

① **「香塔寺略縁起」**と言う書物によりますと、**「推古天皇の乳母の乳の出が悪かったので、七日七夜祈願したところ垂れるほど出るようになった」**と言います。

② また別の説では、「片岡新之助」と言う殿様の乳母の乳が出なくなったので、城内の庭石を一心に拝んだら出るようになったと言います。

その石を地蔵さんとして祀ったとも伝えられています。(旧王寺町史)

この地蔵様は、おそらく山をかたどった自然石を祠に納めたものと考えられ、本来は当地域に見られる大峯山上講のような**『修験道』や『山岳信仰』**の遺品であった

ものと思われます。

・石製の祠の前に「石燈籠」が置かれています。
　その刻銘を見ると「宝暦十四年三月二十四日　　畠田村世話人」となっています。これは250年ほど前の1764年の石燈籠です。

・元々はここから西南にある地蔵山と称する場所に、伽藍を建てて信仰していましたが、**「永禄二年(1589)九月　松永久秀」**の片岡城攻めにより焼失し現在地に移りました。

皆さんの中でもしお乳の出を心配される方がいらっしゃいましたら、折角の機会ですのでどうぞお祈り下さい。きっとご利益があると思います。「役小角像」(えんのおづぬぞう)の説明〉　(境内右側の祠を指して)

〈「役小角像」(えんのおづぬぞう)の説明〉　(境内右側の祠を指して)

・右側の自然石に彫ってある像をご覧ください。
　これは**「役行者石造刻」**で、総高60cmの自然石を肉彫りしたものです。
　「役小角」は修験道を開祖された方で、この葛城山系でも修行を積まれましたので、このような遺石がここにあってもおかしくはないと思います。

(お顔までは良く読み取れませんが、呪術者のようなお姿をされています。
役小角は鬼神をも従えたと言い、あの「一言主」も折檻されたと言われています。このお姿を見ますと、さもありなんと言う気がしますね。)

〈「六歳念仏碑」の説明〉

・乳たれ地蔵の左右にある一対の先の尖った板碑は**「六歳念仏碑」**と言います。
・左の板碑は**「慶長十四年刻造」(1609年)**
　右の板碑は**「天正四年刻造」(1576年)**　　の古いものです。

・六歳念仏と言いますのは、「浄土宗道空が始めた踊り念仏」で、一か月のうち8・14・15・23・29・30日を「六歳日」として、身を慎み持戒清浄にして踊り念仏をしたと言われています。
・今でも京都を中心にして、お盆や地蔵盆に行われています。
・この六歳念仏碑は当地に広まった念仏信仰の広まりを示しているものと思われます。

〈「柳の地蔵」の説明〉

・この左にあります**「地蔵堂」**を昭和47年に新築する時に、傍にあった**「柳の木」**が切り倒されました。
・ただ　この柳の木は、かつてここに参詣に来られた婦人たちが母乳の出が良くな

るようにと、自分の乳をかけたと言う祈願のこもった木で、**「かけた乳で木が白くなっていた」**と言われていました。
・その切った木の扱いを悩んだ末、**「信貴山玉蔵院」**の住職に相談したところ、その夜　住職の夢に地蔵が現れたので、住職は**「その木で地蔵を彫り」**この地蔵堂に祀りました。
・毎年 8/23 には、数珠繰りなどの行事をしています。

移動の注意
・これで「乳たれ地蔵」の説明を終わります。
・それでは、出て左の道を北へ 100m ほど行ったところに、次の「太神宮灯籠」があります。
・この道は**「昔の當麻道」**ですが、狭い道で車が頻繁に通りますので、左側の緑のラインの内側に一列で気を付けて進んで下さい。　それでは出発します。
メモ

⑩「太神宮灯籠」ガイドトーク

・皆さま、この**「太神宮灯籠」**の前の道を**「當麻道」**と言い、昔の古い道ですが狭くて車が頻繁に通りますので、この敷地の中にお集まり下さい。

〈　**「太神宮灯籠」の説明**　〉

・この灯籠は**「當麻(たいま)道」**と**「送迎(ひるめ)道」**の交差点に立つ、**「明かり」**と**「道しるべ」**の灯籠です。

・乳たれ地蔵から歩いてきた道を「當麻道」と言います。そしてこの交差点から山の方へ登って行く道を「送迎(ひるめ)道」と言います。

・江戸時代の天保元年(1830)に、この送迎道を登った「明神山頂」に**「送迎太神宮」**が祀られていました。伊勢神宮さながらの神域であったと言われています。
しかしわずか一年足らずで取り壊されてしまいました。
・こちらの江戸時代の書物の**「大和名所図絵」**を見ていただきましたら良くわかりますが、左下の鳥居のある場所がここになります。その頃からここに灯籠があったことが分ります。

・(絵図を示し)　そしてこの送迎道を登って行き、途中で**鳥居のある「送迎峠」**を過ぎて、明神山頂上の**「送迎太神宮」**に至ります。

・その当時この場所は、付近の店先で立つ女性がいて大変賑わっていました。**「旧６月 16 日がお祭りの日」**で、村人が続々とここに参拝して、出店などを見て帰ったと言います。
　この交差点はすごい賑わいの場所で、**昔の「渋谷スクランブル交差点」**のような所でした。

・絵図には、鳥居の横に江戸幕府の法令を掲げておく**「高札場」**も見えます。

・この灯籠を見て下さい。
　當麻道の方の**東面**には**「太神宮」**と、下の台石には**「村中安全」**と刻されています。
　　南面には「御領主御武運長久」と刻まれ
　　北面には文字はありません。
　　西面には**「嘉永二己酉(つちのととり)年三月」**と刻まれ、これは 1849 年になります。恐らく**「送迎太神宮」**のあった頃の灯籠ではなく、後に
　据え付けられたものと思われます。
・この灯籠は「伊勢神宮」のいわば遥拝所でもありました。

〈　「送迎(ひるめ)道」の説明　〉

・先ほどから、こちらの明神山頂へと続く道を**「送迎(ひるめ)道」**と言っていますが、これはなかなか読めない難しい地名です。
ここは今は「王寺町畠田」ですが、昔は「畠田村」と言い、山上・小黒・尼寺・送迎の４つの垣内(カイト)で構成されていました。

・そしてこのあたりを「送迎(ひるめ)」と言いますが、その語源には色々な説があります。
　　一つの説は、「昔、聖徳太子が斑鳩から河内の磯長へ往還の途次、斑鳩から**「送」**って来た人と、磯長から**「迎」**かえに来た人が、丁度**「昼」**時分にここで出会って**「昼食(ひるめし)」**を取ったから」と言うものです。
　なかなか面白い話しです。
　　皆さんも、ぜひ覚えて下さい。

移動の注意
・これで「太神宮灯籠」の説明を終わります。

・それでは出発します。

メモ

⑪「火幡神社」ガイドトーク

火幡神社の鳥居前に着きました。この神社、**「延喜式」**式内社に載っている格式の高い神社です。拝殿に行く前に、両脇にある石灯篭の話をします。

この石灯篭は、高さ約２．６ｍで２つで１セットです。この石灯篭に彫られている文字には、年代（１８３１（天保２）年３月）、大阪の商売人や役者などの名前があります。この畠田地区の氏神である火幡神社にあるのが不思議ですね。

実はこの石灯篭は、１８３１（天保２年３月）につくられていることからすると、もとは**「送迎太神宮に奉納」**されていたものです。送迎太神宮は、今では、知名度が高くなった王寺町の明神山に、江戸末期に建てられ、お伊勢参りの代わりとして大いに賑わいましたが、一年足らずで取り壊されました。

では階段を上って拝殿前で説明を行います。

この火幡神社、本来の祭神は**「火之戸幡姫（火幡神）」**を祀り、養蚕・機織を担う集団に祀られたのがはじまりとも考えられます。産業振興祈願の庶民の神で、広く信仰を集めてきました。

さて、目の前の拝殿は、昭和４６年に再建されたものです。それ以前の拝殿は、先ほど話をした**「送迎太神宮の拝殿を移築」**したものであったと言われています。

「和州送迎太神宮の図」に描かれている**「舞殿」**に当たる建物でしょうか。しかし、残念ながら建替えられました。

最後に、拝殿の左側が絵馬堂で、王寺町では一番多くの絵馬（５００強）が奉納されており、中には江戸時代の絵馬もあります。覗いてみてください。

メモ

⑫「親殿神社」ガイドトーク

皆さん、ここが**「親殿神社」**です。この神社は**「室町時代西暦 1470 年片岡一族の当時の当主片岡道春がお仕えしていた春日若宮神社から神様をお迎えして「親殿」と名づけた」**のがはじまりでした。**「片岡氏は鎌倉時代からの武士団」**で、はじめは香芝市今泉の辺りに本拠地を置いていたようですが、15 世紀末から 16 世紀のはじめ頃に片岡道春が当主になってからは、王寺町・上牧町辺りを本拠地にするようになりました。

石段が急ですので気をつけてお進みください。

「一番目の鳥居と２番目の鳥居の間で左右を見てみますと」、大きなくぼみが左右それぞれ外側に広がっていることに気づきます。自然な地形とは違い、人の手によって掘りくぼめられたように見えます。おそらく**「このくぼみはお城につくられた堀」**であって、**「親殿神社は片岡道春が新しく造った居館の跡」**なのではないかと思われます。道春は新しく居館をつくるとともに、その一角に神様をお祀りして「親殿」と名づけ、そこが居館であるからこそ、敵からの攻撃に備えるために堀もつくったのだと考えられます。拝殿前は広く平らになっています。ここに居館が建てられたと思われます。

代がかわり**「道春の子の国春が上牧町に「片岡城」をつくりました」**。道春がつくった「親殿」の居館は使われなくなり、「親殿神社」として、**「片岡武士団の守り神としての役割に替わった」**ようです。戦に行く前に武士団はこの神社に集まり戦勝祈願をするとともに、**「軍議を開いた場所」**でもあったようです。

それゆえ拝殿には戦勝に関わる**「武者絵（平　敦盛・熊谷直実）が多く奉納されています。町内最古の絵馬は、寛政２年（1790 年）親殿神社に奉納された合戦図」**で、今は**「奈良県の民俗博物館」**にあります。

拝殿右側の木戸を開けて本殿に進みましょう。本殿迄の廊下に沢山の絵馬が飾られています。

沢山の絵馬をご覧になりましたか？この**「親殿神社には約３００枚の絵馬」**が飾られています。

メモ

⑬芦田池ガイドトーク

ここが[**芦田池**]です。車が通りますので、堤防の池に近い方に集まってください。

この辺りは、昔から葦田と呼ばれ、葦が茂っていたことから**「放光寺古今縁起」**には**「葦田池」**と書かれていました。**「日本書記」**には聖徳太子の進言によって、**「推古天皇 15（607）年の冬」**に大和の国に**「肩岡池(かたおかのいけ)、高市池(たけちのいけ)、藤原池(ふじわらのいけ)、菅原池(すがわらのいけ)」**を造った記事があります。ここにある「肩岡池」は片岡にある池のことであり、以前は片岡が王寺町辺りを言う地名であるとされていたために、今の芦田池が日本書紀の「肩岡池」になると考えられていました。

質問があれば余談で説明

しかし、最近は片岡は王寺町あたりだけを言うのではなく、河合町・上牧町・香芝市あたりまでと言われ、そのため、**「芦田池よりも香芝市の旗尾池や分川池が肩岡池にあたるのでは」**ないかとも言われています。

ただ、芦田池が**「肩岡池」**にあたらないとしても、古いため池であることにかわりはありません

「放光寺古今縁起」は、[**鎌倉時代の正安 4(1302)年に放光寺の僧侶の審盛（しんじょう）が著したもの**]で、**「葦田上池」「葦田中池」「葦田下池」**が出ています。今も芦田池の西側に「中池」と云う池がある。さらにその西側に王寺幼稚園があり、昭和 45(1970)年に王寺幼稚園が出来るまで「山池」と呼ばれるため池だってそうです。これらのため池が「放光寺古今縁起」に記される「葦田下池」「葦田中池」「葦田上池」にあたると思われます。

奈良県立図書情報館に**「名勝旧蹟調査書」**という古文書によれば、芦田池は、**「聖徳太子の時代に農民たちが池を作ろうと話し合っていたところ、翌朝になってみると、たちまちに池が出来上がっていて、農民たちは、それは聖徳太子の不思議なちからによるものだと言って、その池の事を翌朝にできた池と言って朝池（あしたいけ)」**と呼ぶようになったと言います。

この地は歌の名所として、数々の名歌が残されています。

それでは、万葉歌の名所で　　柿本人麻呂の歌を歌います

あすからは　若菜つまむと　片岡の
あしたの原は　けふぞやくめる
＜明日からは若菜を積もうとして
片岡の朝の原は　今日は野焼きをしているようだ＞
春立ちて　あしたの原の　雪見れば
まだふる年の　心持ちこそすれ　　藤原仲実朝臣
＜立春になっても相変わらず降るあしたの原の
雪をみるといまだに旧年のような気がする＞

王寺町と言えば、聖徳太子と深く関わりがあり、多くの伝説がのこされています。
芦田池は東に向かって葛下川から片岡城を望む歴史とロマンを感じさせる場所でしたが、現在は商店や住宅が増えたので美しい眺望は見えなくなりました。
メモ

⑭「放光寺」・「片岡王寺跡」ガイドトーク

「黄檗宗片岡山放光寺」は**「片岡僧寺・片岡王寺」**と呼ばれた古代寺院の跡に建てられたものです。

「片岡僧寺」という名は法隆寺を中心の寺として、今の**「中宮寺の中宮尼寺」**に対して呼ばれた名であるといわれています。

「片岡王寺」は、王寺小学校の建物の下にあり、６世紀末以降に**「敏達天皇の第３皇女片岡姫」**によって建立されたと言われています。

その後、用明・推古・舒明天皇や聖徳太子、奈良時代には聖武天皇がそれぞれ立願興隆に尽くされたことから片岡王寺の名が残っています。

しかし、敏達天皇第３皇女片岡姫の名は古事記や日本書記には出てこず、**「聖徳太子の娘に片岡女王」**と言う方がおられるため、この方の建立だと言う説もあります。

寺院は南向きの**「四天王寺式の壮大な寺院」**で、金堂、五重塔、食堂、講堂、各門などを備えた法隆寺クラスの伽藍配置をもった寺院であったことが、発掘調査で明らかになっています。

「放光寺古今縁記」によると１０４７年に雷が金堂に落ちて延焼し、その後興福寺衆徒に攻撃されたり、**「五重塔が崩れて三重塔」**に縮めたりしながら衰退しました。

なおこの放光寺の名は、再建時の開眼法要に際し、**「仏の光背から光が偶然にも放たれた」**ことから**「放光寺」**という名が付いたと言われています。

片岡王寺の王寺が、王寺町の名前になっています。

「現在の放光寺」は、江戸時代初めになって中国から渡って来た黄檗宗の名僧**「隠元の弟子、鉄牛」**によって再建されたのが始まりです。

本堂の正面にある**「寺額は隠元の書」**で、その名を読むことが出来ます。
隠元禅師は日本へ渡航した折、**「隠元豆」**を伝えたと言われていることは有名な話です。隠元豆は中南米産で１６世紀にヨーロッパを経て中国へ伝わり、その後１７世

紀に日本へ伝わったと言われています。
　放光寺境内には天文１７年（１５４８）に奉納された石灯籠が今も残っています。

メモ

⑮「片岡神社」ガイドトーク

　はい、片岡神社の鳥居前に着きました。説明は拝殿の前で行いますので、このまま入っていきたいと思います。（説明者は拝殿に向かって左側で待つ）

　この**「片岡神社」**の創建はっきりしていませんが、平安時代に完成した『延喜式】神名帳には**「片岡坐神社（かたおかにいますじんじゃ）」**として載っています。

『延喜式』に記録されているほど古い神社であるという意味です。
　こうした神社の事を「延喜式内社」といったり、たんに「式内社」といったりします。中世から近世にかけては**「五社大明神」「五社明神」**と呼ばれていました。
　現在の祭神は、**「天照大神、住吉大神、八幡大神、豊受大神、清瀧大神」**です。この祭神の中では、天照大神、豊受大神は伊勢神宮の内宮、外宮の主祭神です。ビッグな神さんですね！
　また、清瀧大神は空海が我が国に勧請したという清瀧権現【せいりゅうごんげん】のことで、水を司る神さんです。
　片岡神社が**「雨乞いの神」**であり、王寺が大和川水運の要所であったことから見て、この神さんは重要な存在のように思われます。
　さて、明治の終わりには、氏子が少なく、神社の維持が困難になった、大田口にあった**「金計神社（かねけじんじゃ）」**、中村にあった**「大原神社」**、門前（達磨寺本堂の東側）にあった**「住吉神社」**を片岡神社に合祀されました。拝殿の左側がそうですね！そのため、現在では**「王寺全体の鎮守府として祀られ」**、秋祭りはとてもにぎやかに行われます。

最後ですが、境内には神社によく植えられている**「ムクロジの木」**があります。その種子は、数珠とか、羽子つきに使われています。
　ちょっと探してみますか・・・・・
　では、次の案内場所に移りますので宜しくお願いします。

メモ

⑯「達磨寺（だるまじ）」ガイドトーク

達磨寺の境内に入るのは、ほとんどが西門から入る人が多いが、本来は山門（南門）から入ります。南門から入る前に石柱を見ながら**「達磨寺は臨済宗南禅寺派　片岡山・達磨寺」**ですと、説明します。皆さんは本堂に向かって真っすぐ行ってくださいと言い境内中程の藤棚の辺りにある看板の前辺りで達磨寺の創建や境内遺跡の配置などについて説明します。階段を上がって本堂に入ると時は脱帽、拝礼して、拝殿の前に座ってくださいと案内します。

○達磨寺本堂内

それでは、本堂内の説明をさせていただきます。

最初に達磨寺の創建と飢人伝説についてお話します。　**「日本書紀」**に推古天皇21（613）年12月の条をはじめとする諸書によると、**「聖徳太子（厩戸皇子）が、住まいの法隆寺から片岡の里に遊行に来られた時に、道端に飢えと寒さに苦しんでいる飢人に出会われました。飢人に名前を聞いたが答えず、太子はこれを憐れに思い、飢人に食と着てられた紫の衣服を脱いで着せて「安らかに休息しなさい」と言われて心を残しながら立ち去られた。翌日に使者をやって飢人の様子を見に行かせると、飢人は既に死んでいて太子は大いに悲しまれ、側近の者に命じて手厚く葬らせた。後日、屍を検視すると、屍が消え、衣服だけが棺の上にたたんで残されていた。太子はその飢人が真人（ひじり）であったと悟ったと書かれています。**

この飢人が、その後達磨大師の化身と考えられるようになりました。」

そして、**「聖徳太子が飢人のために作ったお墓が、達磨寺の本堂の下にある３号古墳が、その後達磨大師の墓とされ、鎌倉時代 13 世紀前半に勝月上人が達磨大師の墓である３号古墳の上に３重塔を建立して開基し、そして小さな堂が建設されて、本尊として堂内に聖徳太子像と達磨大師が安置されました。」**

そしてその後、東大寺や興福寺などの弾圧や松永久秀の戦火によって荒廃したが、そのたびに復興をとげた。**「特に室町幕府の保護で大規模な復興」**がされました。

それでは本堂内の仏像や展示物などを説明します。現本堂が新しいのは平成 16

年に落慶したものです。

それでは仏像について説明いたします。向って左から**「木造聖徳太子坐像（鎌倉時代・国指定重要文化財）」**です。この像は、**「袍(ほう)という衣服をつけ、笏(しゃく)を持ち、巾子冠(こじのかん)という冠をかぶった聖徳太子摂政像」**です。銘文から鎌倉時代**「建治３（1277）年に、院恵・院道」**が制作したことが判ります。

真ん中が**「木造千手観音坐像（室町時代・王寺町指定文化財）」**です。本像は、もともと500手で構成されていたと考えられていますが**「現在392手」**が残っています。また全ての掌に**「玉眼といって内側から水晶をはめて本物の目」**のように表現されております。この像には、銘文がないのですが、精巧な作りや像の特徴などから、**「当寺中興の際の室町幕府の支援があった時期の作品」**と推測されます。

右が**「木造達磨坐像（室町時代・国指定重要文化財）」**です。銘文によれば、**「永享２（1430）年に足利義教が命じて」**制作させたもので、**「椿井法眼集慶という仏師」**が仏像を作り、彩色は**「画僧の周文」**が担当し、衣が鮮やかな朱色に塗られ、髪や胸毛などまでが細緻な筆づかいで見事に表現されています。また周文は有名な雪舟を育てた人でもあります。

次に、展示物を説明いたします。最初に、**「絹本著色涅槃図」(国指定重要文化財)**です。**「涅槃図は、お釈迦さまが亡くなるときの姿」**を描いたものです。描かれた時期は分かりませんが、絵の構図やお釈迦様が横たわるポーズから**「平安時代後期に描かれた」**と推測されます。現在一番古いのは、高野山金剛峯寺ある涅槃図です。

次に**「備前焼大甕・青磁香炉(中興記石幢地下遺構出土品)＝国指定重要文化　財)」**ですが、平成12年、本堂裏手にある達磨寺中興記石幢の地下から、嘉吉２年銘石碑が碑面を伏せ置いた形で発見され、さらにその下に**「備前焼大甕」が**埋められて、その中に**「青磁香炉」**が入れられていました。碑文などから、室町時代の達磨寺中興に尽力した**「南峯禅師」**に関わるもの　と推測されます。

お堂の真ん中にあるのは、**「達磨寺出土石塔と舎利容器」**(奈良県指定文化財)ですが、本堂立替えに伴う発掘調査で平成14年に発見されました。本堂の地下に小石室をつくり、その中に**「宝篋印塔、合子、水晶製五輪塔形舎利容器、仏舎利を入れ子式に埋納」**したもので、鎌倉時代の達磨寺整備にあたり、達磨大師への追慕の念を込めて納められたと考えられます。現在出土品は、遺構の真上に祀っております。

ケースの中の、**「慶長７（1603）年の徳川家康の朱印状は、達磨寺に寺領30石と境内竹林を寄付」**することを記したもので、**「15代将軍のうち12通が現存」**しています。その関係で、仏像の後ろに、徳川家康から１５代将軍慶喜までの位牌が祀られています。

もう一つ、黒い紙に書かれた掛け軸があります。これは先ほど松永久秀の戦火によって荒廃したと説明しましたが、その後安土桃山時代に第１０６代天皇の正親町天皇の命によって再興されています。その時出された**「正親町天皇の綸旨」**です。

以上でお堂内の説明を終わります。

○雪丸像（ゆきまるぞう）

皆さん、あちらにあるのが、話題の**「雪丸の石像」**です。
段差がありますから足元に気を付けて下さい。右側の階段から上がりましょう。
雪丸は**「聖徳太子が飼っていた愛犬」**です。いつも聖徳太子と一緒に過ごしていたようです。この説明板にあるように、**「人の言葉が理解できる」**ワンちゃんお飼いになられた方は経験済みと思われますが、犬は他の動物に比べ人間の言葉が判るようですね。「お座り」「お手」言われたらちゃんとしますよね。次に**「お経を読む」**と言われています。本当なんでしょうかね・・・聖徳太子は仏教の教えを基に国造りをされ、朝な、夕な法華経を唱えていたようです。横にいる**「雪丸」**も自然にお経が読めるようになったのでしょうか・・・**「門前の小僧経をよく読む」**の例えもありますので。
さて、雪丸は亡くなる時に「自分を達磨塚の丑寅つまり東北に葬るように遺言」したと言われています。丑寅は鬼門に当たります。鬼門に座して達磨大師をお守りするつもりで、遺言したようです。雪丸が亡くなった後、**「聖徳太子が自ら石工に命じて雪丸像を造らせた」**と言われています。**「雪丸の石像は元々は北東の達磨寺１号墳のところに」**ありました。お手元の**「達磨寺パンフレットに江戸時代の達磨寺境内の図」**があります。**「本堂の東北に「こま塚」が確認」**出来ますね。このご覧いただいている**「雪丸石像は江戸時代の物」**です。**「平成 16 年の境内整備の時に現在の南西」**に移し、皆様にご覧頂き易くしています。地元では**「正月元旦に雪丸が鳴けばその年は豊作になる」**との言い伝えがあります。さて、雪丸はどう鳴くのでしょうか？（少し間をおく）**「ワン　ワン」と二度鳴くようです。１月１日ですから」。**
王寺町のマスコットキャラクターの雪丸はこの雪丸像から誕生しました。現在は王寺町観光大使としてイベントのスターとなり活躍しています。**「県内ゆるキャラ大投票で５年連続人気１位に」**なっています。皆さん空飛ぶ**「雪丸ドローン」**も有るのをご存知ですね。ゆるキャラドローンは雪丸が唯一です。王寺町は聖徳太子の愛犬「雪丸」を大変大切にしています。さあー、次の案内場所に移動しましょう。
段差がありますので足元に気を付けて降りて下さい。

○片岡八郎墓（かたおかはちろうはか）

皆さん、こちらの顕彰碑の前へお集まりください。
この碑は**「石心松操(せきしんしょうそう)」顕彰碑**と言いまして、昭和 15 年の**「皇紀 2600 年記念事業」**で建立されたものです。
石碑の一番上に４文字書いてあります。

右から「**石・心・松・操**」と読みます。
その意味は、「石のように固い信念を持ち、雪に耐える松のように節操のある人」だと言う意味です。
その顕彰した人は誰かと言いますと、片岡八郎利一のことなんです。
この右側にある墓石の片岡八郎利一のことなんです。
この右側の墓石が、かつてこのあたりの領主でした「**片岡八郎利一**」の墓です。片岡氏第 17 代の当主です。
　片岡八郎は後醍醐天皇の皇子・「**大塔宮護良親王**」(おおとうのみやもりながしんのう)の家来でした。親王は京都での鎌倉幕府軍との戦いが不利となり、八郎は親王に従って熊野に逃れようと十津川におもむきました。すると十津川の玉置の荘司(しょうじ:　荘園の管理人)「**盛高**」が待ち構えており、八郎は親王を逃がすために敵陣へ切り込んで討死しました。「**1332 年**」のことです。そのおかげで親王は無事に危機を脱することができました。これは、建武の親政(**1333 年**)のわずか 1 年前の出来事なんです。
その功績により、「**大正４年(1915 年)に八郎に正五位が授与**」されました。
これはなんと「**580 年振りの快挙**」です。さすがに天皇家は義理堅いですね。
片岡八郎が戦死したあたりに「**花折塚**」という塚ができました。それは墓前を通る人々が八郎の忠義を偲び、山中の花を折って供えたのが始まりです。・王寺町の偉人がこのように顕彰されているのを見ますと、とてもうれしくなります。

○松永弾正久秀墓（まつながだんじょうひさひではか）

　この墓石が、あの悪名で有名な「**松永弾正久秀**」の墓です。
松永久秀は戦国時代の「**三大梟雄**」(残忍で荒々しい人)の一人で、「斎藤道三・宇喜多直家・松永久秀」の３人が三大梟雄と言われていて、世間では悪名が鳴り響いています。
　松永久秀は織田信長を３度裏切って、最後は「**天正５年(1577)**」に信貴山城で織田信長に包囲され、自害したと言われています。でも、あの信長に２度まで許してもらったと言うことは、よほど有能な役に立つ人物であったろうと想像できます。
　自害したあとライバルの「**筒井順慶**」がここに葬ったといわれています。
墓石には「**松永弾正久秀墓**」、「**天正五年十月十日**」と刻まれていますが、磨滅して判読できません。

織田信長は松永久秀を評して、「**常人では一つとして成せないことを、三つも成した男**」と酷評しています。
　その三つの事とは
　1.旧主家の三好氏を滅ぼした
　2.13 代将軍「足利義輝」を暗殺した
　3.奈良大仏殿を焼き討ちした
　と言うことですが、まあ言う方も言う方ですから割り引いておいて下さい。ど

うしても敗者には悪評がつきまといますので、全部は信用できないと思います。1791 年に出版された**「大和名所図絵」**にもこの墓が載っていますが、もう少しましな墓に描かれています。

爆笑問題の太田光さんの奥さんの**「太田光代」**さんの旧姓を**「松永光代」**さんと言い、松永久秀の末裔と言われています。ビックリですね。

「天正 5（1577）年松永久秀は信貴山城にて織田信長軍に包囲され自害した。そのさい筒井順慶が首級をここに埋葬したと寺紀にあります。」

京都市下京区妙恵会墓地に墓所、三郷町立野に供養塔があります。

○問答石（もんどういし）

はい、次は問答石の説明になります。

「聖徳太子と達磨大師が出会った時、互いに歌を詠み交わした場所」であると伝えられています。

先ほど、日本書紀に載っていた片岡の飢人の話をしましたね。達磨大師と聖徳太子が出会った時、腰を掛けて歌を詠み交わした場所と伝えられていて、正面の石に達磨大師、右の木のそばの石に聖徳太子が掛けていました。

その時の問答歌、歌ってみます。

しな照るや　片岡山の飯（いひ）にうえて　臥せる旅人哀れおやなし

（聖徳太子）

いかるがや　富の小川の絶えばこそ　我が大君の御名をわすれめ　(達磨太師)

（約）～家にいたならば　妻の手枕をするだろうに　草枕で旅先で倒れているこの旅人はいたわしい（聖徳太子）

いいですね、出会った情景が浮かびますね。それでは次に行きます

○九重石塔（ここのえせきとう）

「九重石塔」は、貞永7（1239）年、達磨大師のために建立されたと伝承されています。いらなくなった、灯籠や五輪塔の台石を**「九重に重ねて」**塔にしたものであり、塔身には「法華塔」の銘文がある。元は本堂の西側にありましたが、ここに移設されています。

石塔とは「仏舎利（ぶっしゃり）」と呼称されるお釈迦様の骨が入っている骨壷を安置しておくための供養塔になります。

笠を九重に重ねて塔にしたもので、塔身には「法華塔」の銘文があります。元は本堂の西隣にあって、**「塔の地下には石室を造って一字一石経が大量に奉納されていました。また基壇と軸部に比べて笠が大きくバランスが不安定」**で、笠間の軸がなく笠も不揃いで、寄せ集めの感がします。

これは、使える物は使おうと云うリサイクルやもったいない精神を、日本人は昔からから持っていたのですね。

○中興記石幢（ちゅうこうきせきどう・重要文化財）

「中興記石幢」は、室町時代に荒廃していた達磨寺を興福寺や東大寺の強い大和で禅宗寺院が中興したのは足利将軍家の力添えが大きかったことを、永享（えいきょう）７年（1435）年京都南禅寺の**「惟肖（いしょう）和尚」**が記述して、文安５（1448）年に達磨寺住職の**「南峯祖能（なんぼうそのう）が建立」**したものです。石幢は、高さ 184cm の石塔です、八角形の石柱の上に笠と宝珠のせられ、八面に**「達磨寺中興記」**というタイトルで、復興した顛末が刻字されています
。
石幢は、書かれている文章が**「古文書として重要であると重要文化財」**に指定されています。
平成 12 年に**「石幢を本堂の前に移設しようとした時」**、石幢の地下から隣にある嘉吉（かきつ）２ 年銘の**「石碑」**と、堂内に展示されている**「備前焼の大甕」**と、その中に入っていた**「青磁香炉」**が発見された。これらも重要文化財に指定されています。

◎達磨寺古墳群

達磨寺には３つの古墳があり**「達磨寺古墳群」**と呼ばれています。１号・２号古墳は、達磨寺境内の北東に、３号古墳は、本堂の下にあります。
これが**「1 号古墳」**です。この古墳は、**「6 世紀末ごろ造られた古墳」**で、だれを埋葬したかは分かっていません。古墳の形状は**「横穴式石室をもつ直径 15 ㎝高さ４㎝の円墳」**です。
この古墳は、雪丸の墓として**「雪丸古墳」**と呼ばれています。
また石室と法隆寺が地下道で繋がっていて、**「聖徳大子が密かに法隆寺から通われていた入口」**だと伝わっています。しかし石室の方向から地下道の入り口は、２ 号墳ではとも言われています。
その後、戦国時代に籠城の時に、城から脱出するのに地下道を掘ったのが、この話の「聖徳大子の考えを習った」と言われています。

○薬師石（やくしいし）

これが**「薬師石」**です。この薬師石は、目を閉じて近寄り、両手で石を抱き体

の悪い所があれば、**「そこが治りますようにと」「念じれば病気が全快するという霊験あらたかな石」**です。
ぜひ、体に不安がある方は一度試してみてはどうですか。

○達磨寺方丈（だるまじほうじょう）＝県指定文化財

達磨寺方丈は、江戸時代の1667年寛文(かんぶん)7年に建てられた建物で**「県指定文化財」**です。

「方丈とは、お坊さんの住まい」のことを言います。仏間を中心に左右に2つの計3つの部屋を置き、さらにその前にも同じように3つの部屋を置くという禅宗の様式にのっとった間取りとなっています。

また、屋根に特徴があります。**「西側が入母屋造りであるのに東側は切妻造り」**になっています。本来は、両方とも入母屋造りであったものが、東側にある庫裏の建築で改造されたのではないかと言われていました。老朽化が進んでいるため、平成30年から解体修理が行なわれて、屋根の解体工事で東側の屋根の造りが最初から今のような**「切妻造り」**であったことが確認されました。完成まで2年程度かかる予定です。

そして**「亀集庭という石庭も名園」**です。

※これで、達磨寺のガイドを終わります。お疲れでした。土曜・日曜・祝日には王寺観光ボランティアガイドの会の者が定点で待機していますので、また、ぜひ来てください。

メモ

⑰「西安寺跡」・「舟戸神社」ガイドトーク

・皆さま、この池を**「新池」**と言いまして、池の南側にある大灯籠からの参道の奥が舟戸神社です。

西安寺は、この舟戸神社を中心とする場所がその跡地と考えられています。

〈　「西安寺跡」の説明　〉(拝殿の前あたりで説明します)

・西安寺は**「聖徳太子建立の46ヵ寺」**に含まれている寺院遺跡で「久度寺」とも呼ばれていました。
・考古学的には、この辺りは小字名で**「西安寺」**の名称が伝えられています。
　また、舟戸神社東側の字名に**「門の脇」・「馬場の脇」**と言う名称も伝えられており、**「西側に門」**があったのではないかと推測されています。
　そのことから**「西向きの法隆寺式伽藍配置」**とされていました。
　舟戸神社の東側の字名に**「瓦谷」**と言う名称も伝えられており、瓦窯があったのではないかと推測されます。(今も瓦谷池がある)
・また別の説では、7世紀中頃に百済王の末裔を名乗る渡来系氏族の**「大原史氏」**(おおはらのふひと)　によって創建されたとも言われています。
・少なくとも**「14 世紀末までは存続」**しており、**「16 世紀を最後に文献からその名前が消えます。」**
・大和の西の玄関口に大きな塔が聳えたつ光景を見て、難波から舟で入ってきた異国人たちはさぞ驚いたことと思われます。
・舟戸神社の本殿北東部に僅かな隆起があり、そこに「塔跡」があったと推定されていましたが、長らく発掘調査が行われず具体的にはよく分かりませんでした。

塔跡推定地の発掘調査

・**「H26年」**に本殿北東部を発掘してみると、塔跡は推定された場所で確認され、基壇の規模も大きいことが分りました。
・**「H27/2～3月」**の**「第3次調査」**では、**「礎石2個、心礎抜取穴1基」**、礎石抜取穴4基、**「基壇外装」**が見つかりました。
　「塔基壇」の規模は、基壇の一辺が12.99mで、**「法隆寺とほぼ同じ」**だと分かりました。
　この塔基壇が作られたのは、**「7世紀末から8世紀初頭」**と考えられます。
・さらに詳しく調べるために、**「H29/11」**から**「第7次調査」**を行いました。
　この時は、塔基壇の北東角を含む約70㎡を調査しました。

【礎石】
　塔の側柱東列4個のうち**「3個の礎石を発見」**しました。あとの1個は抜き取られていました。
【乱石積基壇(らんせきづみきだん)】(基壇の外壁に自然石を積上げて化粧したもの)
　創建当初は**「切石積」**できれいに化粧されていたと思われるが、改修時に**「乱石積」**になったと考えられます。
　雨落溝は発見されず、なだらかに落ちていく傾斜を検出しました。

【炭層】

基壇面に 10cm の炭層が堆積していました。

恐らく、**「塔の廃絶時」**に廃棄する部材を集め、**「焼いたもの」**と思われます。

【調査の結果】

寺院名	建立時期	塔基壇規模	初重塔身			塔高さ
			大きさ	中央間	脇間	
西安寺	7C 後～8C 前	13.35m	6.75m	2.25m	2.25m	
法隆寺	7C 後～8C 初	13.80m	6.42m	2.68m	1.87m	32m

金堂推定地の発掘調査

・**「第３次調査」**で、大量の礎石を破砕していた場所で、基壇の段差と思われる場所を金堂としていましたが、調査の結果、礎石・基壇も無く**「金堂跡では無い」**ことが分りました。

・**「第４次調査(H28 年)」**で塔基壇の北側を発掘して、**「礎石、礎石抜取穴　等を発見」**し、**「金堂基壇と推測」**されましたが、確定までにはいたりませんでした。

・「第８次調査（H30 年)」では、金堂跡と推測される場所を発掘しました。その結果、塔と同じく**「高さ 40～70 ㎝乱石積の基壇の外装」**を確認、そして**「基壇の高さは、約 60 ㎝」**ありました。又柱の跡が基壇の北と南端の間で、**「礎石２個、礎石抜き取り穴１基、抜き取り痕跡２か所」**が見つかりました。これらの礎石の距離から**「南北の柱間は４間」**とわかりました。見つかった**「礎石の大きさは２個とも約 80 ㎝×70 ㎝の楕円形で直径約 49 ㎝の柱座」**が造られておりました。

そして基壇の南端で大量の瓦が出土しています。

これらのことから**「金堂の規模は、桁行５間、梁行４間で南向き」**に建てられていました。**「基壇の大きさは、南北 12.2m、東西 14.9m」**で、**「建物の大きさは、桁行（東西）約 11.0m、梁行（南北）7.6～8.3m」**に復元できることがわかりました。

この結果、前回まで西向きの法起寺式伽藍配置と思われていたのが、**「南向きの四天王寺式伽藍配置」**であったことが明らかになりました。

金堂は塔とほぼ同じ７世紀末から８世紀初頭頃に建てられ、鎌倉時代までに廃絶したと考えられます。

今後は、回廊や講堂・中門の有無等西安寺跡の全体を明らかにしていく調査が進められる予定です。

〈　「舟戸神社」の説明　〉

・**「衝立(ついたて)神社」**とも呼ばれ、**「伊弉諾(いざなぎ)神」**が投げ捨てた**「杖」**から化生した神と言われます。この神は**「物を衝立のようにして、ここから入れないようにする」**所に祀る神様です。

・**「久那度(くなど)神」**、春日神を祀り　春日神社とも言われていました。
・久那度(くなど)神は道祖神などと同じで、旅人を守る神様で、大和川や當麻道を往来する人々を守るために勧請され信仰されてきました。
・本殿は春日造一間社で、拝殿には多数の絵馬が奉納されています。
・この手水鉢は嘉永元年(1848年)に**「絹屋佐太良」**が奉納したものです。
こちらの石燈籠は嘉永３年(1850年)に**「木綿屋佐兵衛」**が奉納したものです。

・これで「西安寺跡」と「舟戸神社」の説明を終わります。

メモ

⑱「舟戸の渡し」ガイドトーク

「舟戸神社（西安寺）」へ向かう大和川堤防上にて

まずは周りの景色から見ていただきます。

西南の方向からまず手前に**「片岡山」**があります。**「片岡山飢人伝説」**や万葉集で詠まれたり、**「武士団片岡氏」**の片岡山で南はその遠くに見える**「二上山」**の手前近くまでを片岡の地と呼ばれています。

西の方角には**「亀の瀬」**から**「信貴山」**方面が見えます。

そして**「生駒山」**から、**「矢田丘陵」**　手前には**「聖徳太子」**が飛鳥から斑鳩へ出てきて**「法隆寺」**を建立するときに明日香から産土神を祀ったといわれる万葉集で数多くの歌が詠まれた**「紅葉、櫻の三室山」**が見えます。

大和川を挟んで南側には小高い**「舟戸山」**が見えますが、このちょっとした山から大和平野が一望出来、この付近の地名にまつわる**「舟戸の渡し」**や、舟運の基地として舟の運航を見守る望楼として大変良い場所と言えるでしょう。

この「**舟戸**」と呼ばれるこの地に明治はじめに橋がかかるまで渡しがあったと言われていますので舟の渡しの「**舟渡**」と書く地名も残っているようです。

舟戸の渡しは聖徳太子が太子道（当麻街道）を通って、法隆寺の夢殿といわれているお住まいから、自らの御陵を造営していた河内の「**叡福寺**」までの、重要な経路の一部でした。

この付近は難波の宮から大和川を利用した「**舟運**」や「**龍田古道**」と太子道がこの付近で交差している重要な地域であったことでしょう。

大和川を利用する舟運は「**亀の瀬**」が岩と急流や滝がある難所で、難波からの「**剣先舟**」が通過することが出来ず、いったん舟から降りて、今の三郷付近まで陸路で進み、「**魚築舟**」に乗せ変えて、「**明日香**」や「**平城**」の各地を結んでいたようです。

この大和川の流れがなだらかな広い浅瀬があるこの舟戸という地域に、舟運の基地としての機能を持つ集落があって、その地域が舟戸という地名として残った可能性もあるのではないでしょうか。
難波から都へ向かう唐の要人たちが、舟で柏原市青谷付近までさかのぼり、「**竹原井頓宮（たかはらいのとんぐう）**」に宿泊して法隆寺や飛鳥へ向かったり、船でこの付近を渡るに際して、増水時は西安寺や片岡王寺に宿泊してもてなしを受けたのではないでしょうか。
メモ

⑲「Ｄ５１型蒸気機関車」ガイドトーク

みなさん、Ｄ５１型蒸気機関車の前へお越しください。
ここでは、この機関車の簡単な説明と、今皆さんが立っておられるこの場所についてお話します。
まず、Ｄ５１型蒸気機関車ですが、『**デゴイチ**』の愛称で親しまれていますね。この『**D**』は何を意味しているか、ご存じですか。機関車を動かす動輪の軸数をＡ　Ｂ　Ｃ　Ｄで表しています。「**D**」は「**動輪が４軸**」あることを示しています。動輪が３軸ならＣ型となります。Ｃ型は速度が出るので主に旅客列車用、Ｄ型は力が強く主に「**貨物列車用**」として使われてきました。
『デゴイチ』は、「**昭和１１年から２０年にかけて計１１１５両製造**」されました。

製造時期によって形に違いが見られます。戦況が悪化してからは、ここに展示されているＤ５１８９５もそうですが、**「デフレクタ（排煙板）や歩み板が木製」**になったものもあります。

ここにあるＤ５１８９５は、昭和 19 年から 47 年にかけて**「関西本線や草津線で活躍」**しました。

運転キロ数は、1,633,968ｋｍで、重量 125 トン、長さ 19.5m、高さ 3.98m、幅 2.936mです。

戦後には、集煙装置や重油併燃タンクなどを勾配線区に向いた構造に改造して、関西本線最大の難所だった加太（かぶと）越え（亀山～柘植（つげ）間）に臨んでいました。25 パーミールの連続カーブの鈴鹿山脈を、前後に一両ずつのデゴイチがついた貨物列車が挑んでいく様が、今でも目に浮かんできます。

次に皆さんが今おられるこの場所ですが、となりに走っている近鉄田原本線に関係があります。田原本線は**「大正７年（１９１８）に大和鉄道」**として開業しました。

開業当時のレールの幅は、１０６７ミリの狭軌で、国鉄と同じでした。

この場所で、レールの幅が同じだったので、大和鉄道は国鉄とレールがつながっていたのです。大阪方面から来た貨物列車がここを通って大和鉄道に乗り入れていたのです。ここは、引き込み線のあとなのです。

その後、昭和２３年に大和鉄道は標準軌、今の近鉄と同じ１４３５ミリに改軌電化し**「近鉄の子会社」**になり、引き込み線はなくなります。大和鉄道が正式に近鉄に吸収合併されたのは、東海道新幹線が開業したあの日、そう、１９６４年１０月１日でした。

メモ

⑳「久度神社」ガイドトーク

王寺町久度という地名に存在するこの久度神社は大変に珍しい神社で、ある意味、日本で唯一の神社であると言えます。

それはこの神社の創建に当たって祭られた久度神と言う、もともとは朝鮮北部方面で祭られていた**「産土神」**ではないかと言うことがあります。

この神社の鳥居に掲げてある**「偏額」**に書かれている、**「徳維馨（とくこれかおる）」**という３文字がこの神社のすべてを表しているといっても過言ではないでしょう。

この神社の創建時期は定かではありませんが、**「第５０代桓武天皇」**が即位し、平安遷都が行われた際、奈良の地から４体の神様を平安の地に創建された**「平野神社」**にご祭神として移し祀られました。そのご祭神は、当社の**「久度神」**と平城京付近の**「今木皇大神（いまきのすめらおおかみ）」**などの４体といわれています。

この２体の神様は、もともとは渡来系の産土神で渡来人が大和へ移住したときに持って来て祀ったと言われ、生まれてから死ぬまで真近で祀る神様だそうです。

聖徳太子は飛鳥から斑鳩へ出て、法隆寺を創建しましたが当時、産土神を三室山の神丘神社付近に祀って守り神としたそうです。

それでは桓武天皇はなぜ渡来系の産土神である久度神を平安京へ持っていこうとしたのかと言うと、桓武天皇の母である、**「高野の新笠」**という方が、渡来人で百済の王の直系の子孫であり、古来の風習で新しい都の守り神として、平野神社に祀ったと言われています。

その後、久度神社は神社の名に反して、主な御祭神の久度神がおられない状態が長く続いたのですが、地元の氏子の熱心な要望で、昭和４３年、勧請が許されて無事１１７５年ぶりに王寺へ帰えられて、現在**「久度神」「八幡神」「住吉神」「春日神」**の４神が祀られています。

久度神社の久度という言葉は朝鮮北部の古い言葉で「クナドゥ」竈（かまど）または竈と煙突のつなぎ目のことを指す言葉で、神様たちのおられる天上世界と人の住む地上をつなぐ連結点という意味があるようです。

和歌山高野山の九度山という地名は、もともと高野山を開いた弘法大師を讃岐から訪ねてきた自分の母（玉依御前）が女人禁制の高野山に入れず麓の慈尊院と言う寺に滞在したので、母思いの弘法大師が会うため月に９回も訪れたと言う逸話から出ているそうですが、竈（久度）を作る良質の粘土が産出した山と言う説もあるそうです。

ここでこの偏額　**「徳維馨」**の意味なのですが、仁徳天皇が夕暮れ時に多くの民の竈から煙が上がっているのを見て、凶作に当たって、自ら行った租税を免ずる善政の効果を、納得されたと言う話があります。

徳とは為政者の徳のある政治のことで、維新の維は徳と下の馨と言う漢字を強調する言葉で、馨るとは、心地よい笛の音が広く響き渡ったり、竈で黍を調理するときにでる香ばしい良い香りが広く漂っていくような様子を表すそうです、ですから

この３文字の意味は為政者が行う善政が、笛の音や黍の焼く良い香りが広く広がっていくような様子を表しています。

儒教をバックボーンに持つ朝鮮北部方面からの渡来系の一族が、仏教系の為政者たちに対抗して自らの政治姿勢を諌めた意味深い言葉となっていると読める偏額です。

日本には久度神社と言う神社はここ以外には淡路島に１社あり、祭神は仲哀天皇（第１４代）であり久度神ではないが淡路島に**「物部郷」**と言う地名があり渡来系の**「物部氏族の久努（奴）氏」**と関係があるのではないかとも言われている。

王寺町の久度神社も物部氏族　久努（奴）氏との関係も考えられるそうです。

場所を移動して「石灯篭の前で」　この石灯篭は、王寺町で一番古いと言われる暦応３年（1340 年）の銘を持つ石灯篭です。この新しい小屋根の下に保護されて展示されています。

メモ

㉑「大和川風景」ガイドトーク

大和川は、奈良県の笠置山地を源として、奈良盆地の中央部を西へ流れながら、**「県内の川を集め、県境の亀の瀬渓谷を抜けて大阪平野を流れ、大阪湾に注ぐ川です。全長は約 68 ㌔㍍で、流域面積は 1070 平方㌔㍍、そして流域人口が約 200 万人の奈良県最大の 1 級河川」**ですが、昭和 40 年代には生活排水や工業排水などで、水質は**「日本一汚い」**と言う汚名を着せられてきましたが、平成 24 年代の全国一級河川の調査では、10 年間で水質が改善された**「上位 4 位」**に大和川が入りました。

「北に生駒山、信貴山、東に矢田丘陵、西に明神山、南に片岡山が眺望」できます。

河川敷は、ジョギングやウォーキングなど広く利用されています。冬場はガン、カモ類の渡り鳥が飛来してきます。

では、皆さんは「多聞橋」を渡ってください。渡ると、三郷町です。

㉒「松永弾正久秀供養塔」ガイドトーク

・皆さん、この供養塔が、あの悪名で有名な**「松永弾正久秀」**の供養塔です。

・松永久秀は戦国時代の**「三大梟雄」**(残忍で荒々しい人)　の一人と言われ、「斎藤道三・宇喜多直家・松永久秀」　の３人を三大梟雄と言うほど世間では悪名が鳴り響いています。

・松永久秀は織田信長を３度裏切って、最後は**「天正５年(1577)10月10日」**に信貴山城で織田信長軍に包囲され、自害したと言われています。

・織田信長は松永久秀を評して、
「常人では一つとして成せないことを、三つも成した男」と酷評しています。
その三つの事とは
1.旧主家の三好氏を滅ぼした
2.13代将軍「足利義輝」を暗殺した
3.奈良大仏殿を焼き討ちしたと言うことです。

・ただどうしても敗者には悪評がつきまといます。彼の悪役イメージは江戸時代の「常山紀談」と言う逸話集によって成立した所が大きいと言えます。

・自害したあとこの麓の三郷では、地元の人々が松永久秀を偲んで、供養塔を建てて供養してきました。
この横に供養塔の説明版がありますが、地元ではこの「供養塔」を「顕彰碑」と称しています。その説明によると、天正５年10月10日　信貴山城と自己の命、平蜘蛛茶釜と共に爆死。・・**「その死を悼み灰燼の内より兵火をくぐり五輪の石塔をこの地に運び組み立て将兵を慰霊するものなり。昔も今も未来もその祭祀絶えることなし」**と記されています。
「未来もその祭祀が絶えることはない」と記されてます。地元では人気があった武将だったのでしょう。

・茶人としての松永久秀は武野紹鷗（たけのじょうおう）に師事しており、その交流は広いものでした。
　名器「平蜘蛛茶釜（ひらぐものちゃがま)」の他、「九十九髪茄子（つくもかみなす)」も一時所有しており、茶人としての位置づけは高かったものと思われます。当時の教養人だったのでしょう。
　またこれ以外に、今までの城は、**「平城」**でしたが、奈良に初めて**「櫓（天守閣)」**を有する**「多聞城」**を造りました。この多聞城をモデルに織田信長が**「安土城」**を

建てたとも、いわれています。
　これらの事から、昨今では、**「茶人の達人」「城づくりのスペシャリスト」「チョイ悪おやじ」**として見直されています。

・(王寺町達磨時には墓が、京都市下京区妙恵会墓地には墓所が、あります。)

・爆笑問題の太田光さんの奥さんの「太田光代」さんの、旧姓を「松永光代」と言い、松永久秀の末裔と言われています。ビックリですね。

・以上で「松永弾正久秀供養塔」の説明を終わります。
メモ

㉓「龍田大社」ガイドトーク

　はい、龍田大社の大きな鳥居前に着きました。
　ここに**「官幣大社龍田神社」**とあります。ここ龍田大社は、式内社の名神大社であり二十二社（上（かみ）・中（なか）・下（しも））の中七社に数えられ、**「官幣大社に選定」**された古社です。
　龍田大社は、**「風の神様」**として古くから多くの方に親しまれています。
　創建は古く、今から約１２００年前、**「第１０代・崇神天皇（すじんてんのう）」**の時代、国内に凶作・疫病が流行する中で、天皇の夢に「吾が宮を朝日の日向う処、夕陽の日隠る処の龍田の立野の小野に定めまつりて云々」と言うご神託があり、その通りに宮を造営すると疫病は退散し、豊作に成ったと伝えられています。それが竜田大社の創建とされています。
　聖徳太子が法隆寺を建立する際、大社に参拝し竣工の無事を祈願されたとも言われています。

　立地場所は、大和川が奈良盆地から大阪平野へと流れ出る地点、すなわち、大和国と河内国を結び、さらには九州を超えて大陸とも結ぶ水上交通の要所に当たる高台に位置しています。

それでは次に正面の拝殿前での集合をお願いします。
いいですか・・・　それでは説明をはじめます。

龍田大社の祭神は**「天御柱大神と国御柱大神」**で、その神徳は五穀豊穣を守る**「風の神」**として厚く崇敬されています。

ご神紋は八重の楓で、楓は文字通り「木」偏に「風」と書き、陰陽五行では風の神様は木気に当たることを示しています。また八重とは、東西南北とその間の四方向を指し、風の神様の「気」がすべてに行きわたるとの祈りが込められています。

ところで**「風の神」**に対して、**「水の神」**は、砂かけ祭りで有名な河合町の**「廣瀬神社」**ですね。また、「火の神」は生駒市にある往馬大社です。

ここでちょっと、龍田大社に伝わる話をします。・・・・
中国の元と言う大国が、大きな船団で九州近くまで迫ってきたころの話です。いよいよ大船団が九州の玄界灘に姿を見せ、あちこちの神社やお寺では、調伏の祈願が始まりました。ここ龍田大社でのある晩、天地が大鳴動し、大きな竜巻が天に昇り、大きな袋の玉となって西のほうに飛んでいきました。
この袋の玉が、不思議なことに、船団の上で破れ、大暴風雨となって敵の船団を吹き飛ばしたと言うお話です。

最後に、拝殿横の**「高橋虫麻呂」**の歌碑の説明をしますので移動を願います。

「高橋虫麻呂」は奈良時代の養老、神亀、天平にかけての宮廷歌人です。

歌碑ですが、虫麻呂が大和から難波への途中、一夜泊っただけで桜の花が散っていく。何とか、天皇がご覧になる日まで、花を散らす風は吹かないでくれ、風神で名高い龍田大社で「風祭り：花を散らさぬようにする祭り」をしようという意味です。ちなみに、この碑は平成19年4月に、奈良女子大学地域貢献事業の一環として寄贈されたものです。
これで説明を終わります。
メモ

㉔「神奈備神社」ガイドトーク

龍田大社の大鳥居を出て右の坂道をお進みください。龍田大社の末社と言われています「神奈備神社」をご案内します。
この坂道を下りますと JR 三郷駅に出られます。この坂道は**「安村坂」**と呼ばれており、途中に**「神奈備神社」**があります。道幅が狭いですから車にはお気を付け下さい。
此処が「神奈備神社」の入り口です。

「神奈備神社」は、**『龍田大社の末社』**です。
神奈備とは**「神様が住む杜」**といわれ、各地に**「"かむなび神社 "」**があり、表現の漢字も４種類ほどあります。いずれも意味は"神様の住む森"であります。
　拝殿は、柱だけです。本殿は、明治初期の造営で「龍田造り」と言われています。出来た時代は、分かりません。
　この神社には、「神奈備神」「坂根天神」「今井天神」の三神が祀られています。

　神奈備を詠んだ万葉歌が多く残されています。
代表的な万葉歌の一つとして、鏡王女（かがみのおおきみ　藤原鎌足の妻）の歌があります。
　"神奈備の　磐瀬の杜の　呼ぶ子鳥　痛くな鳴きそ　吾が恋まさる"
　磐瀬の杜は三郷駅近くで大和川の中州の杜のことです。
　この歌の意味は
　磐瀬の杜で、郭公（カッコー）が大きな声で鳴いていますが、
　私の貴男への恋はそれよりも大きいですよ
と恋心を詠まれています。
昔の歌人は恋多くロマンチストが多かったようですね・・・
この石段は急な石段なので気を付けて登ってください。
さあーお参りしましょう。
メモ

㉕「高橋虫麻呂の碑」（三郷駅南側の交差点）ガイドトーク

これが、奈良時代の万葉歌人の**「高橋虫麻呂の歌碑」**です。
この歌碑の歌は、

我が行は　七日は過ぎじ　龍田彦　ゆめのこの花を

風にな散らし

です。
この歌碑は、三郷駅前の土地改良事業の完成に合わせて「立野農住土地区画整理組合」が昭和60年に建立したものです。

大阪大学名誉教授の**「犬養孝先生」**の揮毫によるもので、犬養先生の歌碑の中でも秀逸とされています。
（犬養孝：万葉集研究の第一人者で、明日香村に犬養万葉記念館があります）
現代語訳は、
私たちの旅は、七日は超えないでしょう。風の神である龍田彦よ、決してこの花を風に散らさないでください。

歌の背景は、
高橋虫麻呂の君主であった、藤原宇合が知造難波宮事して務めを果たし、難波に下った時の作と考えられています。
（天平４年奈良の都から難波に出張する友人を、この地まで送ってきたときに詠んだ歌です。）
龍田彦・龍田姫は本来「龍田」の地の風神であったといわれており、現代では龍田大社の摂社に祀られています。

歌碑の台座の中には、昭和 60 年(1985 年)に造った際の記念として、それから100年後(2085年)に開封する**「タイムカプセル」**が埋め込まれています。

メモ

㉖「磐瀬の杜」ガイドトーク

この場所が、磐瀬の杜です、中に進んで下さい。
　それでは、**「鏡王女」**の歌の万葉歌で知られる**「磐瀬の杜」**についてご案内いたします。

　　その歌が、碑に刻まれています。

神奈備の　磐瀬の杜の　喚子鳥(よぶこどり)　**いたくな鳴きそ　吾が恋まさる**

（神奈備の岩瀬の森の喚子鳥よ、あまりひどく鳴かないでおくれ、そんなに鳴いては、私があの人を恋しく思う心が増すばかりだから。）

　この碑がある当三郷町の磐瀬の杜のほか、隣りの斑鳩町**「竜田公園の南側」**にも同じような磐瀬の杜と言う碑があります。

　三郷町の記録によると今の大和川は龍田川と呼ばれていて、この三郷町の三室山から竜田川に支流として流れ込む、関谷川という小さな川との合流点に鬱蒼とした中州あったらしく、今の歌碑があるところから良く見えていたとも言われています。

　河川改修の折に削られて無くなったという記録が三郷町の「わがふるさとの万葉集」と言う冊子に書かれています。

　この碑はこの地域の土地区画整理事業に当たって、龍田大社の領地の一角のこの地点に昭和 50 年代に整備されたようです。

　ただし、龍田大社の元宮は大阪と奈良の県境の稜線に近い地域にあったらしく、源平の時代に戦火で消失し、礎石が残っていて、後に現在の場所へ移転したそうです。

ですから斑鳩町の龍田公園南側に碑があり、龍田神社の西にあり、神岳神社がある三室山付近を磐瀬の杜と考えるほうが地形的に正しいかも知れません。

　三郷町、斑鳩町とも自説を主張していますのでどちらが本物の磐瀬の杜であるかは決着が付いていないようです。

　歌碑の主、鏡王女は**「天武天皇」**の皇后で大変身分が高く、鏡王を父とし**「額田王」**の姉とも言われ、ともに天武天皇の后と言われています。天武天皇の死後は藤原鎌足の后となったそうです。また鎌足が病気になったとき、鏡王女の発願で興福寺の前身の山階寺が開基されたと言われています。

メモ

㉗「関地蔵」ガイドトーク

県道と街道の角に大きな道標がありますね。墓石を利用したものですかね？**「左大阪堺道」**、**「右　龍田神社道」**となっています。

これが**「関地蔵」**です。ここにある石仏は通称**「関の地蔵さん」**と呼ばれています。案内板にも書かれていますが、天武天皇の頃、大和を中心に四つの関が設けられた。東国へは**「不破の関」**、中国へは**「吉備の関」**、山陰へは**「石見の関」**、そしてこの**「龍田の関」**が設けられました。日本書紀によると、ここがその関所跡と推定されています。

大和川の氾濫の際に地蔵さんの顔が壊れていますので、ちょっと覗いてみてください

メモ

㉘「峠八幡神社」ガイドトーク

はい、**「峠八幡神社」**（大阪府柏原市）に着きました。疲れましたね！

先ず注意事項ですが、この場所で当会のメンバーがハチ刺されたことがありますので、気を付けて下さい。（ハチの活動期のみ）

「峠八幡神社」については、詳しいことは解かっていないとのことです。峠八幡神社の名前は、明治５年にこの名前なったと言われています。

この神社前の道は、**「龍田越え」**と呼ばれていました。ちょっと昔を思えば、奈良

の都から難波への途中、この峠で腰かけて汗を拭いて休んでいたのかも知れません。

石段の左横にある建物ですが、ここには、**「石造地蔵菩薩坐像」**が安置されております。この仏像は、花崗岩を浮き彫りにしたもので、像は、立像でなく半跏趺座（はんかふざ）で座られた地蔵菩薩で珍しいものです。又姿は、左手に宝珠を持ち、右手は膝に垂れています。

造られた年代は分かりませんが、鎌倉から室町時代初期に造られたと考えられています。

この地蔵は、**「延命地蔵」**として今でも広く信仰されています。

後で覗いてみてください。

メモ

㉙「亀の瀬地すべり」ガイドトーク

（「亀の瀬地すべり資料室」の前あたりで説明する。
ただし資料室で近畿地方整備局の職員から説明がある場合は省略する。）

・この上の斜面を見ていただけますか。この上を峠地区と言い大規模な地滑りが発生した地区です。

・この地区の地滑りは、非常に長い歴史を持っています。移動した土中から発見された木片の年代測定では、４万年前という結果が出ており、地滑りはそれ以前から発生していたと見られます。
・近年の地滑りは、明治 36 年７月、昭和６年 11 月～昭和８年、昭和 42 年２月の３回起きています。

・**「昭和６年(1931)11 月」**の地滑りは大阪府堅上村(現柏原市)　峠地区の山が大和川に向かって滑り出したことから始まりました。そして水平に 30m も移動しました。翌昭和７年７月の豪雨の影響で、前年から始まった地滑りは大和川向かい側の王寺町藤井地区で大和川の河床が**「9m 以上隆起」**　して流路が塞がれ、大正橋や国道沿いの民家が浸水しました。この地滑りは昭和８年まで続きました。

・また**「昭和 42 年 2 月」**の地滑りは、清水谷地区で亀裂が発見され、峠地区と併せて、26m 移動して大和川が 250m に渡って川幅が 1m 縮小されました。

・地滑りの原因は、大和川北側の山から川の下まで、固い岩盤の上に**「すべり面」**と呼ばれる粘土層があり、地下水の影響ですべり面の上に堆積している土がゆっくり移動しました。その結果　山から滑ってきた堆積土塊の力で川の底が押し上げられ、大和川が閉塞する事態になりました。

・その時、大和川右岸(北側)を走っていた**「大阪鉄道の亀の瀬トンネル」**も　この地滑りで崩壊しました。
　でも、その後わずか**「半年で左岸(南側)ルートを建設」**して、これが現在の大和路線となっています。　わずか半年で復旧、すごい力ですね。

・地滑り対策工事の内容は
　① 地滑り面上部の土を削り取り
　② 杭を打ち土塊の動きを止め
　③ 地下水を抜き取る
　と言った大規模な三つの対策工事を実施しました。

　その中で、杭打ち工事では我が国最大の直径 6.5m、深さ 96m の杭 55 本を含め 170 本の深礎工が施工されています。　この大きさは通天閣の高さに匹敵するものです。　驚きですね!!
　また平成 20 年に地下水を抜くトンネル工事をしている時、76 年前に崩して埋もれたと思われていた**「亀の瀬トンネル」**の一部が偶然にも発見されました。このトンネルは近畿地方整備局に申請すると見学することができます。

・亀の瀬地滑りの詳細は**「亀の瀬地滑り資料館」**に模型展示やパネル展示をしていますので、事前申し込みをすると説明・見学ができます。

(資料室から大和川近くまで下りて行って)
メモ

㉚「亀の瀬」ガイドトーク

・大和川のこのあたりを**「亀の瀬」**と呼んでいますが、**「岩石」**が多く見られ、また**「銚子の口」**と呼ばれる**「滝」**も昔はあり、**「地すべり」**も起きていましたので**「交通の難所」**となっていました。
滝があったなんて、今の光景からは想像できませんね。

・ただそれでも大和川は、大和盆地から大阪方面へ抜ける唯一の水路なので**「古代より重要な交通路」**でした。

・特に江戸時代は、荷物の運搬は舟運が主でしたので大和川を利用しましたが、亀の瀬のような難所があるため、ここを境にして、**「下流(大阪側)」**を**「剣先船」**、**「上流(奈良側)」**を**「魚梁船(やなぶね)」**と言う川船が運航して役割分担し、亀の瀬で**「荷継ぎ(荷物の積み替え作業)」**をしていました。

・その荷継問屋として亀の瀬には**「藤井問屋」**・**「魚簗(やな)荷場」**などがありました。

・**「藤井問屋」**は、これから行く竜王社の対岸(大和川左岸)あたりにあり、そこで荷物を**「牛馬に積み替えて」**大和各地まで運んでいました。
この藤井問屋の**「関係印判類」**が保存されており、**「王寺町指定文化財」**になっています。

・**「魚簗荷場」**は立野村地侍の**「安村喜右衛門」**家が代々支配しており
(一時期支配が変わった期間もあったが)、竜王社の前の浜で剣先船の積み荷を荷揚げして約 1km ほど　上流まで陸送し、そこの魚梁浜から**「魚梁船」**で大和各地まで荷物を運んでいたそうです。

メモ

㉛「亀石」ガイドトーク

・大和川の中ほどにある　あの大きな石を見て下さい。
・あの石は亀の甲羅のような形をしていますので、**「亀石」**と言われています。

・慶長十四年(1609)　に大和国竜田藩主の**「片桐且元」**が領地の米を運ぶため、船の往来が良くなるようにと、亀の瀬の開削をしましたが、岩の根が深くとても切れなくて、その際に亀石の首を切ってそこからは血が流れていたと言います。(大和名勝志)

・慶長十九年(1614) の大阪冬の陣では、徳川家康が奈良から大阪へ出陣する際この首のない亀石を不吉に思い、ここの道を通らず　山道を繕っていったそうです。

・昔は、亀石の上に**「龍田大明神」**が鎮座していたと伝えられ、亀の瀬より上流を**「神南備川」**と言って、**「龍田大社(本宮)」**が支配していました。

・また、ここは役小角の最後の**「経塚」**(現在は龍王社が最後の経塚となっている)とも言われ、室町時代には亀石に文字が刻まれ、宝篋印塔が並んで立って
いたとの記録もあります。

・伝説では、この亀石を動かすと、大和川が洪水を起こすと言われています。
メモ

㉜「龍王社」ガイドトーク

・皆さん、ちょっと足許が悪いので、気を付けて降りて下さい。

・**「役小角(えんのおづぬ)」**が葛城山系に**「法華経二十八巻」**を埋納した場所を**「経塚」**と言い、そこを**「葛城二十八品(ほん)」**と言います。一品(いっぽん)
が和歌山友が島で、最後の二十八品がこの**「龍王社」**と言われています。

・この一品から二十八品までたどることが**「葛城修験」**とされており、過去多くの行者がこの二十八品をたどって修行を重ねてきました。

・この竜王社には**「船仲間」**が航行の安全を祈った祠があり、**「大阪剣先船問屋中」**と刻まれた**「寛政三年(1791)」**の石燈籠も立っています。

・また鳥居の柱には**「堂島濱」**と刻まれています。ご覧になってください。

・以上で**「亀の瀬」**関係の説明を終わります。

今から河内堅上駅まで歩き、そこで解散となります。それでは出発します。
メモ

㉝「沈下橋」ガイドトーク

ここが、**「沈下橋」**です。
この沈下橋は、斑鳩町と河合町の間に架けられた大和川唯一の沈下橋ですが、**「潜水橋」**と表記されています。橋の名前は、**「大城橋」**と呼ばれています。
幅員は、**「2m」**程ですが、**「普通乗用車も通行」**することが出来ます。一方通行でないので橋に侵入する場合は、対向車が来ていないか確認する必要があります。
昭和橋から新御幸橋まで道路橋がなく斑鳩町から河合町への移動する際の最短ルートになっているので、通行量が多いです。

余談ですが、沈下橋について紹介します。
沈下橋の呼び方は、地方によって違いがあります。呼び方は潜水橋・潜没橋・潜流橋・沈み橋・潜り橋・冠水橋・地獄橋とも呼ばれています。**「土木用語として潜水橋・潜り橋が正式名称」**です。

全国的に有名なのは、重要文化的景観に選定されている高知県の**「四万十川流域」**の沈下橋です。ちなみに、高知県には１級河川および支流に６９か所あります。

これで沈下橋の説明終わります。これから橋を渡り対岸に移動しますが、車が来

たら対向できないので、隊列が長い場合は、先に一人は、**「対岸に渡り車の侵入を待ってもらう立ち番」**、そしてもう一人は残り**「橋に侵入して来ないように立ち番」**をしてください。

それでは、欄干もなく幅も狭いので足元に十分注意して渡って下さい。

メモ

㉞「県立竜田公園」ガイドトーク

ここが**「県立竜田公園」**です。紅葉の名所として有名です。

今は、万葉集に詠まれている**「在原業平」**の**「千早ぶる　神代もきかず龍田川　からくれなゐに　水くくるとは」**の龍田川の、紅葉の名所として整備されています。

この龍田の街は、法隆寺の鎮守として建てられた「龍田神社」と「奈良街道」を中心に発展し、江戸時代初期に片桐且元の城が造られ城下町として繁栄し、江戸後期には１２０軒の商家が立ち並んだと伝えられています。

現在の**「竜田川」**の呼び名についてですが、鎌倉時代１２３８年頃に書かれた**「聖徳太子伝古今目録抄」**に、法隆寺の西南の龍田大明神のその西に川あり平群川というと記されていて、**「平群川」**と呼ばれていたことが分かります。また江戸時代中期に描かれたとされる地図にも「塩田川」と書かれています。そして１７６５年の**「龍田神宮神社の口上書」**にも、この川を**「塩田川」**としています。現在でも、「塩田橋」が架かっており「塩田川」の文字が残っています。

以上のことから江戸時代後期までは竜田川とは呼ばれていなかったことがうかかえます。

竜田川の呼び名がいつから呼ばれるようになったかは、不明ですが、昭和１２年に発刊された**「大和王寺文化史論」**に、紅葉の名所の竜田川のきっかけとなった思われる記述があります。**「江戸時代後期に国学者藤門周斎の発案で、寂れようとする龍田の街の挽回策として河畔に楓を植栽しました。その後保護団体が増殖と保存に努め、遊覧地として楓を観る客が川を埋める盛区となった」**と書かれていて、これが現在の紅葉の名所が誕生したきっかけと考えられます。その後、紅葉の名所とし

て知られるようになったので、万葉歌にからめて**「竜田川」**と呼ばれるようになったのではと考えられます。

平安時代の歌人の在原業平や能因法師の歌など、多くの歌に詠まれている本当の龍田川は、龍田本宮の南を流れる**「大和川」**だと言われています。又、今は枯れていますが三郷町の龍田本宮の西にあった龍田川ではないかとも言われています。
（参考添付の、江戸中期に書かれた地図（龍田大社所蔵　和州平群郡立野龍田本宮）を参照）

昭和１５年に、**「念仏橋」**から**「御幣岩」**までを県立竜田公園として整備されて現在に至っています。

以上で竜田公園の説明を終わります。これから片桐且元の城跡に向かいますが、狭い坂道を上がりますので足元に気を付けて移動してください。
メモ

㉟「片桐且元城跡」ガイドトーク

ここが**「片桐且元の城跡」**です。
片桐且元の城址は，竜田川の東一帯が城跡です。今いるところが「広間」と呼ばれている本丸の跡らしいです。
そして、北へ屋敷跡が広がり、堀が縦・横にめぐらされ規模は雄大であったようです。城郭の東を**「花畑」**と呼ばれ、城跡の周囲は**「追手」**（城の正面の意味）と呼ばれており、表門が北に向いていたようです。

ご存知と思いますが、片桐且元についてご紹介いたします。
且元は、安土桃山時代から江戸時代初期の武将で近江の出身です。若いときから豊臣秀吉に仕え、天正１１年の賤ケ岳（しずがたけ）の戦いで「七本槍」の一人に数えられる功績をあげて１万石を与えられた。その後秀吉の没後は秀頼の後見となり、関ヶ原戦い後は、終始豊臣家のために尽くしましたが、しかし慶長１９年に方広寺大仏鐘銘事件で関東のスパイ視されて大阪城から追放され、そして大阪の陣では徳川方につき、４万石に加増されこの地に城を築いたが、まもなく６０歳で

この世をさりました。
　その後、４代続きましたが跡継ぎがなく、郡山藩になりました。
メモ

㊱「三室山」ガイドトーク

ここが「三室山」です。

この**「三室山」**は、標高８２mの丘で、県立竜田公園の一部に含まれていて、現在は桜の名所として知られています。
「三室山」は、古来から神の鎮座する山とされており、別名**「神南備山」**ともいわれています。
現在の「三室山」は、竜田川と同様に、江戸中期に書かれた龍田大社所蔵の「和州平群郡立野龍田本宮」の地図には、書かれておりません。これ以降に、竜田川と同時頃に名付けられたのではないでしょうか？　同じ地図には、龍田本宮の西側に「三室山」が描かれています。
現在も同じ位置に、標高 137.2mの「三室山」があります。
今居ります三室山の北側の登り口には、平安時代の歌人の**「在原業平」**と**「能因法師」**の歌碑があります。

「百人一首 17　在原業平朝臣作」
千早ぶる　神代も聞かず　竜田川　からくれなゐに　水くくるとは

「百人一首 69　能因法師作」
あらし吹く　三室の山の　もみぢ葉は　竜田の川の　錦なりけり

平安時代に詠まれた龍田川は、龍田本宮の南を流れる大和川本流と考えられています。（本文は、この龍田川ですが、現在の竜田川に合わせて、竜田川になっています）
それでは、山頂に向かいます。
山頂に着きました。山頂は、県立公園として整備されています。春は山一面、桜

でピンクに染まります。
説明板の奥に、高さ 1.9mの五輪塔が見えます、これは**「能因法師の供養塔」**と伝えられているものです。
すこし休憩を、してください。
今から山を降ります。
メモ

㊲「神岳神社」

今着いたのは、**「神岳神社（かみおかじんじゃ）」**です。この神社は、聖徳太子が飛鳥より**「産土神（うぶすなかみ）」**をこの地に安置され、太子の勅願所として祀られていましたが、いつのまにか祭神が、**「須佐之男命」**になっております。
そして、鳥居前には、須佐之男命の別名**「牛頭天王（ごずてんのう）」**の、名前を刻んだ４基の石灯篭があります。

もう一つ、社殿の前に一対の狛犬があります。これは、幕末の石工**「丹波佐吉」**の最後の作と云われるものです。
中型の狛犬で、全長 64ｃｍ、体高 52ｃｍです。足座には、文久３年９月吉日と彫られています。
姿は、渋みのある顔つきで足先はまるっとしていて可愛らしいです。そして、横顔のきりきり巻き毛はぐるぐるで、前足にもぐるぐるがあります。
「丹波佐吉」とは、江戸末期に旅の石工となり全国に多くの石造物を作っており、特に大和で一番多く作っております。そして、石の尺八を作って、時の孝明天皇から「日本一」の賞賛を賜るほどでした。

メモ

㊳「尼寺厨（にんじくりや）神社」ガイドトーク

(鳥居の前に立って)

・この木造の**「明神鳥居」**をくぐると参道の奥に拝殿が見えますね。
　ここの境内は大きな樹木が生い茂り、何か森閑とした雰囲気が漂っています。

・この神社のご祭神は**「御饌都（みけつ）大神**(=豊受大御神：とようけおおみかみ)」と言います。この神様は**「伊勢神宮の外宮の神様で、天照大神の御饌(ぎょせん：神に供える食べ物)を整える神様」**が祀られています。
　位の高い神様であり、この尼寺地方には豊かな農産物があったことがうかがえます。

・この神社の由緒としては、明治 26/5 の「神社明細帳」には、
「大和誌二(に)尼寺邑厨司(ずし)乃火幡神社摂社他トアルハ当社ヲ指スナリ」
となっているので、この神社は火幡神社の境外摂社かもしれません。

・正面の拝殿には多数の「絵馬」が奉納されていますので、中をのぞいて見てください。

・この拝殿の向うの本殿は**「一間社流造り銅板葺き」**のとても簡素な造りです。

・例祭日の 3/25、7/21、10/17　は尼寺の人々により挙行され、巫女の神楽奉納などがあります。

・この境内の北側に境内摂社として、菅原道真を祀る**「天満宮」**があります。
　朱色の鳥居の向こうに絵馬殿があり、その奥に南向きに鎮座しています。

・朱色の鳥居の後ろの石燈籠は
　右側が　「嘉永元歳申年十二月建立」
　左側が　「和州葛下郡寛文十三年　厨大明神」
　　「奉寄進　口年八月　尼寺村」　　の刻銘があります。

・また絵馬殿にも多数の絵馬が奉納されていますので、これもご覧になってください。

・この天満宮の東側の林の中に、古代の瓦窯があったと言われています。
　この辺りの土は焼き物に最適な粘土質で、恐らくここで焼いた「瓦」等を古代寺院の尼寺廃寺で使用されたものと思われます。
　（瓦等は重量があるので、大型建物の傍に瓦窯を造るのが普通です。）

かつては、入口の鳥居の前の畑に瓦の破片が散乱していたそうです。

以上で「尼寺厨神社」の説明を終わります。

メモ

㊴「平野古墳群」ガイドトーク

はい、香芝市の平野１号古墳（車塚古墳）前に着きました。

ここに「平野古墳群」の説明板がありますので、「平野古墳群」の説明を行いたいと思います。

この辺りには、消滅した３つの古墳も併せて**「６つの古墳」**が分布していたことが知られていて、**「平野古墳群」**と呼ばれていました。

古墳群の東端には目の前の**「平野１号古墳（車塚古墳）」**と**「平野２号墳」**があり、西端に国指定史跡の**「平野塚穴山古墳」**が残されています。

香芝市の有形文化財（古文書）には、江戸時代に平野塚穴山古墳が顕宗天皇陵として、平野１、２号古墳は御廟所として陵墓に準じる扱いを受けていたことが読み取れるとのことです。

この平野１号古墳の横穴式石室は全長９，２m、玄室幅２．８５m、高さ約２mで、その西奥にある平野２号古墳も横穴式石室で全長１０m、玄室幅３．８m、高さ２．６mの大きさです。

では、次の場所（正楽寺近くの**「平野塚穴山古墳」**）に行きます。

メモ

㊵「正楽寺」ガイドトーク

正楽寺は、**「浄土宗のお寺」**で、現在の本堂は鉄筋コンクリート作りで、昭和 45 年に建てられたものですが、前の本堂の保存されている鬼瓦には文化 6 年（1809年）の文字が残っています。本尊は、**「阿弥陀如来坐像」**です。

又、境内には香芝市の指定文化財になっている、像高が 125.8ｃｍの**「石造線刻阿弥陀如来坐像」**があります。　　これが、その石仏です。
高さ 2.3m、巾 95ｃｍ、厚さ 15.5ｃｍの、板状の二上山の凝灰岩に、浅く線刻されています。

銘文はありませんが、おだやかに波打つ線条は優美で、**「平安時代の後期」**の特徴を伝えています。

この板上石は、古墳に使う石棺の部材を転用したものではないかとの説があります。

メモ

㊶「平野塚穴山古墳」ガイドトーク

続いて、平野塚穴山古墳を案内いたします。古墳入口まで通路が狭いですから一列でお願いいたします。

この古墳は、昭和 48 年に国の史跡に指定されています、平野古墳群の 1 つです。

7 世紀後半から末頃の飛鳥時代に築造された終末期の古墳です。一辺が 18m高さが 4mの**「方墳」**と推定されています。

埋葬施設は、1.5mの羨道が付く**「横口式石槨」**で、全長が 4.47m、玄室は、奥行き 3.5m、巾 1.5m、高さ 1.76mで、壁は、二上山の凝灰岩の切石を組み合わせて作られています。壁には漆喰が塗られていました。

江戸時代の幕末まで、**「顕宗天皇陵」**とされていました。現在埋葬者は特定されていません。石槨は同時期の高松塚よりずっと大きく立派な切石の石槨と漆塗りの棺の破片や金環や中空玉等の出土品から見ると皇族級の貴人であったと思われます。

これらのことから**「茅渟王」**の墓とするのが最もふさわしいと考えられています。

気を付けて下りてください。

メモ

㊷「正福寺」ガイドトーク

・この寺は「往生要集」の作者、恵心僧都源信（942～1014 年）が作られた阿弥陀如来坐像(像高 85cm)をご本尊として、平安時代の 1008 年に開基されたと言われています。

・宗派は浄土宗です。
・この本堂は入母屋造、錣屋根(しころやね)、本瓦葺、妻入り、向拝付きの建物です。

錣屋根　(寄棟造屋根の上に切妻屋根を乗せたような屋根)
妻入り　(棟木と平行の側面の対側【棟木と直角側】を正面とする)
向拝付き　(屋根の中央が前方に張りだした部分)

・こちらの銅製灯籠には
天保十□八月十日
□□禅門の刻銘があります。

・境内墓地には、「元禄十二年」、「享保二丁酉九月二日」、「宝暦四年甲戌年十月十四日」、「宝暦七丁丑年十月八日」、「文久三癸亥年」
などの古い年号名のある墓石があります。

・840 年ほど前に法然上人（浄土宗開祖　1132～1212 年）も法隆寺夢殿で祈願の後、磯長谷の叡福寺（聖徳太子墓所）への墓参の途次、当山を訪れこの阿弥陀様に祈願されたと言われています。

以上で「正福寺」の説明を終わります。

メモ

㊸「武烈天皇陵」ガイドトーク

香芝市今泉のきれいに整備された御陵が**「傍丘磐杯丘北陵」**（かたおかいわつきのきたのみささぎ）と呼ばれ、**「第25代武烈天皇陵」**です。傍丘磐杯丘には南の陵もあります。その陵は、武烈天皇の祖父の**「第23代顕宗天皇陵」**です。

王寺町の**「第7代孝霊天皇陵」「傍岡馬坂陵」**と合わせて**「傍丘三陵」**と呼ばれています。

武烈天皇陵の形は山形であり、自然丘陵を前方後円墳のように石垣を巡らせていますが、丘陵上部には古墳らしきものは見当たりません。在位は498年12月から507年1月までの僅か**「8年間」**であり、**「18歳」**で亡くなられたと言われています。宮は桜井市出雲の十二柱神社に**「泊瀬列城宮跡」**（はつせのなみきのみや）の石碑があります。

「日本書記」の武烈天皇は、**「政務に精励され厳格な裁判を行ったと」**記されていますが、一方天皇の異常な行為を記し、**「非常に悪劣なる天皇」**として描かれています。これは相矛盾する記述が併存することになります。

その相違の背景には血縁関係が薄い次代の**「継体天皇の即位を正当化」**する意図が**「日本書記」**の側にあり、武烈天皇を**「暴君に仕立てた」**とする説が一般的です。事実**「古事記」**には、**「暴君としての記述は無く」**、太子がいなかったことと天皇の崩御に後の継体天皇が皇位継承者として招かれたことしか記述されていない。
少なくとも「古事記」と「日本書記」とでは、武烈天皇の伝承にはかなりの食い違いがみられます。

メモ

㊹「志都美神社」ガイドトーク

志都美神社に入るまえに、「歌碑について」説明いたします。

志都美神社の裏の森は武烈天皇陵までつながっており、椎の木を中心した原生林で、県の指定の天然記念物の指定を受けています。

この椎の木の原生林を歌ったものではないかという、**「万葉集」**の歌がこの歌碑に

刻まれています。
　歌は、**「片岡のこの向う峰に椎蒔かば今年の夏の陰にならむか」**と書かれています。作者は、不詳です。
　それでは、本殿に向かいます。

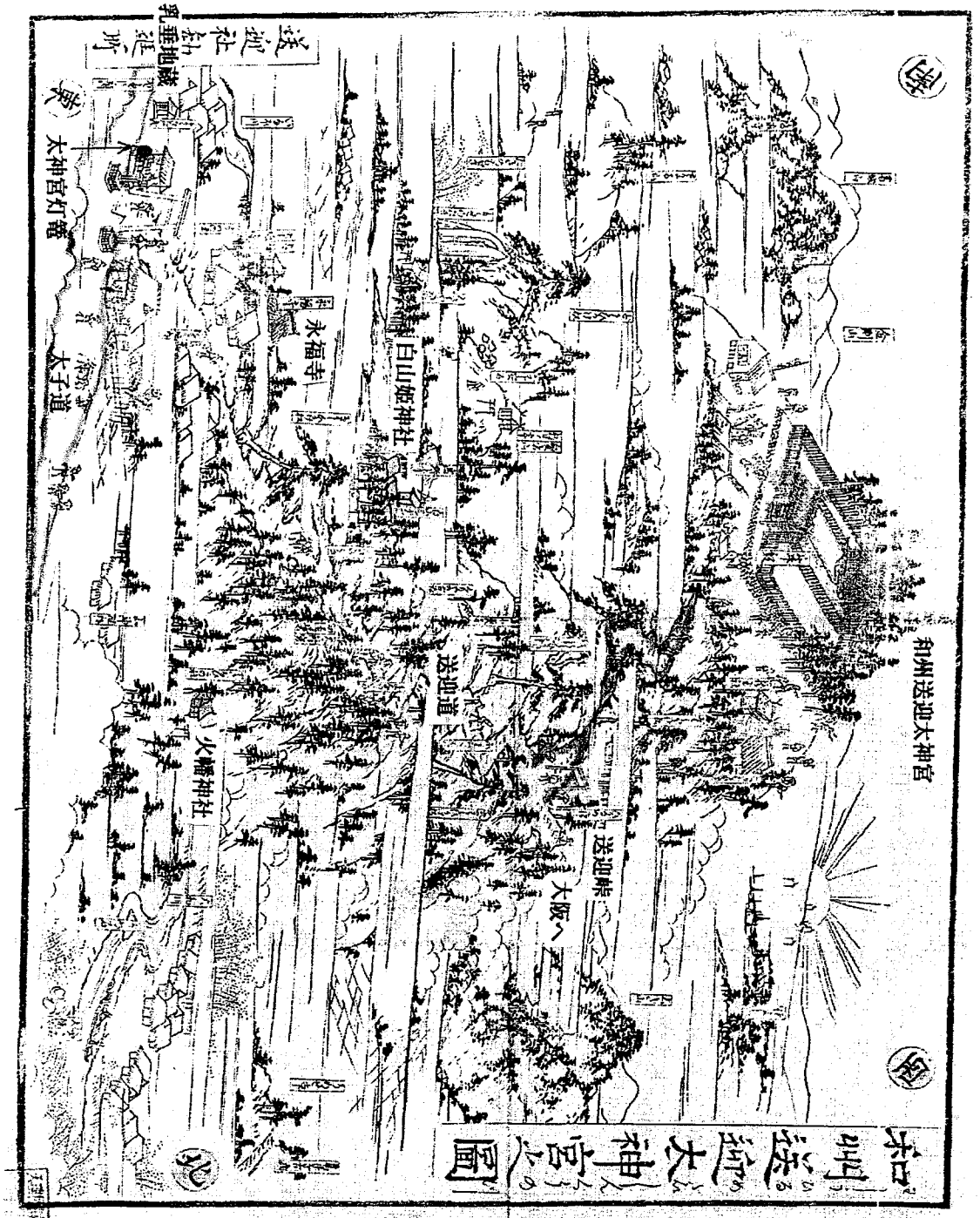
　志都美神社は、弘仁４年（８１３年）に、藤原鎌足の６世孫の片岡綱利により、片岡家の鎮守として建てられたと伝わっています。
　祭神は、**「天児屋根命」**、**「中筒男命」**、**「誉田別命」**が祀られています。
　本殿は、三間社流れ造りで、江戸時代の中期の建物です。

少し、志都美神社にまつわる、ありがたい話を２つ紹介します。
　１つ目は、元禄年間に、盲目の僧が境内で湧いている清水で、目を洗ったら霊験があったとの伝えがあり、江戸時代の「大和志」には、**「清水八幡」**として紹介されています。今でも、境内の石鳥居や手水鉢に**「清水八幡」**の文字が残っています。
　それで昔は、**「清水神社」**と言われていたとの、記述もあります
　また良い水があった事を証明するように、となりに造り酒屋があります。

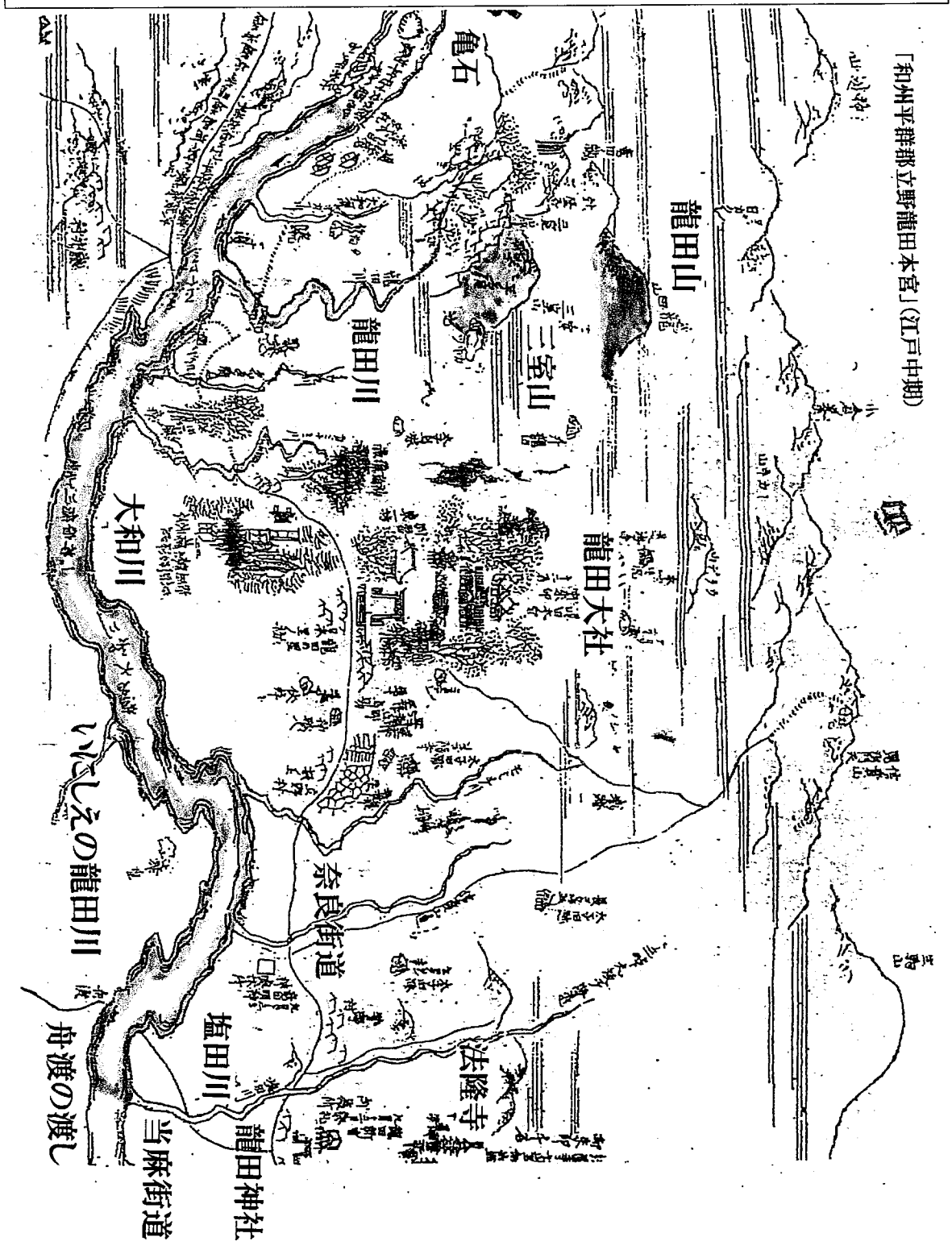
　２つ目は、明治１０年と１２年に、全国的に、コレラが流行していたので、氏子が志都美神社に、コレラの進入防止の祈願をした結果、ひとりの患者も出なかった。それを喜んだ氏子が奉納した**「記念碑」**が本殿の裏の石垣に埋め込まれています。
　日本へコレラが最初に侵入したのは文政５年で第２次の流行は安政５年で死者が２万５千人に達したそうです。
　それでは、本殿の裏の記念碑を見ていただくので移動いたします。
　これが**「記念碑」**です。明治１２年８月に奉納されています。
　後ろの森が、先ほどご説明いたしました、椎の木を中心とした原生林です。ゆっくり見てください。

　これで「志都美神社」の説明を終わります。
メモ

和州送迎太神宮之図



和州平群郡立野龍田本宮絵図



「和州平群郡立野龍田本宮」(江戸中期)

「王寺観光スポットガイドトーク集」

平成３１年２月10日　初版

「王寺観光ボランティアガイドの会」制作

会員名	